

# はじめに

お正月の風物詩となっている全国高校サッカー選手権大会が、今春の大会で 90 回となりました。全国高体連サッカー専門部では、90 回大会を記念して、『高校サッカー90 年史』を発刊すべく数年前から準備を進め、今夏ようやく発刊の運びとなりました。

毎年行われているサロン 2002 公開シンポジウムでこのことを取り上げるようになったのは、『高校サッカー90 年史』の編集・執筆にサロン会員が深くかかわり、月例会でも何度か取り上げていたことが背景にあります。シンポジウムの演者として登壇した、同誌編集長の北原由、編集委員の賀川浩、牛木素吉郎、中塚義実はいずれも会員であり、この他にも白髭隆幸が編集・執筆に携わっています。前年度のシンポジウムで「育成期のサッカーを語ろう！」と題してキッズから U-21 年代までのサッカーを取り上げたサロン 2002 が、歴史と伝統あるユース年代の競技会の節目に当たってこのテーマに取り組んだのは必然であったと言えるでしょう。

本報告書には、シンポジウムの内容だけでなく、「高校サッカー」から連想される、会員からの 4 本の寄稿が掲載されています。高校サッカーの歴史を振り返る入門書としてご活用いただければ幸いです。

スポーツ文化研究会「サロン 2002」は、サッカー・スポーツを通して 21 世紀のゆたかなくらしづくりを“志”とする異業種ネットワークです (p.5 参照)。その前身は、1980 年代末の、日本サッカー協会科学研究委員会「社・心グループ」に認めることができます。社会学や心理学に興味を持つ、サッカーの研究者・指導者による小さな研究会でした。それが 1990 年代以降、サッカー界を取り巻く環境の劇的変化と、インターネットの爆発的な普及によって、全国各地の熱き“同志”がつながり、世にも不思議(?)な異業種ネットワーク、サロン 2002 が生まれました。いまでは全国各地にいる (海外にもいます) 約 180 名の会員がゆるやかにつながりながら、サッカーをはじめとする様々なスポーツ、芸術などを通して“ゆたかなくらし”を、それぞれの現場で探っています。

“志”を同じくする仲間とそのネットワークが、サロン 2002 です。創設からかかわる者として、このすばらしき仲間とネットワークを誇りに思うとともに、これからも“志”の輪を広げ、“ゆたかなくらしづくり”を目指す仲間を増やしていきたいと感じています。

少しでも興味を持ってくださった方、ぜひ、サロン 2002 のオフィシャルサイトをのぞいてください！  
<<http://www.salon2002.net>>

2012 (平成 24) 年 5 月  
サロン 2002 理事長 中塚義実

# 目 次

はじめに.....	1
スポーツ文化研究会「サロン2002」理事長	中塚義実
目 次.....	2
シンポジウム編.....	3
資 料 シンポジウム開催要項.....	4
スポーツ文化研究会「サロン2002」とは何か.....	5
各演者のプレゼンテーション.....	6
コーディネーターより.....	6
プレゼンⅠ：『高校サッカー90年史』発刊に向けて.....	7
北原 由（『高校サッカー90年史』編集委員長）	
プレゼンⅡ：高校サッカーの90年を振り返って.....	10
牛木素吉郎（スポーツジャーナリスト）	
プレゼンⅢ：日本サッカーのルーツ校 東京高等師範学校.....	20
中塚義実（筑波大学附属高校教諭／サロン2002理事長）	
プレゼンⅣ：関西で育まれた高校サッカーを振り返って.....	28
賀川 浩（スポーツジャーナリスト）	
ディスカッション.....	38
寄 稿 編.....	49
高校サッカーの思い出－王国紡ぐ黄金の歴史～静岡の高校サッカー～私の体験.....	50
三日市整形外科 田中俊也	
「日本ラグビー全史」を語る－全国高校ラグビーは91回・日本フットボール大会から花園まで.....	55
帝京中学・高等学校 嶋崎雅規	
野球統制令とスポーツ.....	58
弁護士 白井久明	
U-18フットサル 90周年に向けての1年目.....	62
(株)シックス代表取締役社長 本多克己	
資 料 編.....	65
サロン2002月例会一覧.....	66
サロン2002公開シンポジウム一覧.....	71
シンポジウム参加者・報告書作成にご支援いただいた方々.....	72

# シンポジウム編

## プレゼンテーション

北原 由 (『高校サッカー90年史』編集長／都立武蔵野北高校サッカー部監督〔当時〕)  
牛木 素吉郎 (スポーツジャーナリスト／ビバ!サッカー研究会代表)  
中塚 義実 (サロン2002理事長／茗友SC理事長／筑波大学附属高校)＝コーディネーター兼  
賀川 浩 (スポーツジャーナリスト)

## ディスカッション

2012 (平成24) 年3月4日 (日)

味の素スタジアム会議室

### 主 催

スポーツ文化研究会「サロン2002」

### 後 援

日本サッカー史研究会、ビバ!サッカー研究会、  
筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、  
NPO 法人横浜スポーツコミュニケーションズ、  
DUO リーグ、(株)アレナトーレ

サロン2002 公開シンポジウム

# 「高校サッカー90年史」を語ろう！

―戦前の中学サッカーから未来へ―

「サロン2002」は、サッカーを中心にスポーツ文化を語り、21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする人びとのネットワークです。毎月の月例研究会のほか、2001年度より公開シンポジウムを毎年開催しています。本年度は標記タイトルで、長年日本のサッカーをけん引してきた高校サッカーの歴史を語るシンポジウムを企画しました。

全国高校サッカー選手権大会は、ことし第90回大会を迎えました。これを機に全国高体連サッカー専門部では、今夏の発刊を目標に、『高校サッカー90年史』をまとめています。これは、1918(大正7)年にはじまった大会からの歴史を記録するものです。

その編集と執筆に携わるサロン2002会員を演者とし、戦前の中学サッカー(当時は学校制度が異なる)から未来のユースサッカーまでを語り合うのがこのシンポジウムです。戦前のサッカー史を共有するとともに、これからの日本のサッカーとスポーツのあり方を、多くの方と語り合えることを楽しみにしています。

(「サロン2002」の趣旨とこれまでの公開シンポジウムについては裏面に掲載しています)

## 記

主 催 : スポーツ文化研究会「サロン2002」

後 援 : 日本サッカー史研究会、ビバ! サッカー研究会、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ  
NPO 法人横浜スポーツコミュニケーションズ、DUOリーグ、(株)アレナトーレ

日 時 : 2012(平成24)年3月4日(日)16:30~19:00  
(受付16:00~)

会 場 : 味の素スタジアム会議室(受付は「サブエントランス2」に設置)  
(京王線、飛田給駅北口から徒歩5分)

※同スタジアムで13:00キックオフで行われる「東京ヴェルディvs松本山雅」の試合後に開催します。

※16:00以降にスタジアム脇の「ロイヤルホスト」前に集合していただければご案内します。

演 者 : 賀川 浩 (スポーツジャーナリスト)  
牛木 素吉郎 (スポーツジャーナリスト/ビバ! サッカー研究会代表)  
北原 由 (『高校サッカー90年史』編集長/都立武蔵野北高校サッカー一部監督)  
中塚 義実(サロン2002 理事長/茗友 SC 理事長/筑波大学附属高校) = コーディネーター兼

参加申込 : サロン2002HP トップページ(<http://salon2002.net/>)の、「インフォメーション」  
「参加申込はこちら」(<http://salon2002.net/application/>)からお申込み下さい。

参加費 : 1,000円

事務局 : 高田敏志 (サロン2002 理事)  
※お問い合わせは [salon2002@j-sps.com](mailto:salon2002@j-sps.com) までお願いします。

## ＜スポーツ文化研究会「サロン 2002」とは何か＞

「サロン2002」は、以下の設立宣言に賛同する「同志」によるゆるやかなネットワーク組織です。

### サロン2002設立宣言

(2000年4月1日)

我々は、以下に「サロン2002の“歴史”」、「サロン2002の“志”」及び「サロン2002の“会員”」を述べることにより、ここにあらためてサロン2002の設立を宣言する。

#### 【サロン2002の“歴史”】

サロン2002は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社・心グループ」（財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980年代後半からこの名称で活動）を前身とし、1997年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン2002」として活動を行ってきた。

#### 【サロン2002の“志”】

サロン2002は、サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン2002の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン2002の“志”を実現する上で、2002年FIFAワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

#### 【サロン2002の“会員”】

サロン2002は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン2002の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン2002からの“Take”を求めただけでなく、サロン2002に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン2002は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形で“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

2011年度の会員は、現時点で約160名。全国各地にいる会員は、小・中・高・大の学校関係者、Jクラブ・地域クラブの関係者、フットサルや草サッカーの関係者、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどのメディア関係者、サポーターやボランティア、サッカー以外の競技の関係者など多様です。国や地方自治体のスポーツ行政に携わる者や、JFA、各都道府県FA関係者もいます。様々な形でサッカー・スポーツにかかわりながら、“志”を実現させようと活動する者で構成されるのが「サロン2002」です。

「サロン2002」の主たる活動は、月例会の開催と、その内容を核とするホームページの運営です。本シンポジウムは公開型月例会として毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しています。

詳細は、ホームページ <<http://www.salon2002.net>> をご覧ください。

### ＜サロン 2002 公開シンポジウム＞

- 2001年度…FIFA コンフェデレーションズカップ総括
- 2002年度…FIFA ワールドカップ総括
- 2003年度…地域で育てるこれからのスポーツ環境
- 2004年度…totoを活かそう！
- 2005年度…クラマーさん、ありがとう！
- 2006年度…2006年ドイツで感じたこと
- 2007年度…サッカー観戦を楽しもう！-スタジアム編
- 2008年度…地域からみたJリーグ百年構想
- 2009年度…2019年ラグビーワールドカップを語ろう！
- 2010年度…育成期のサッカーを語ろう！

## ＜公開シンポジウム報告書について＞

本シンポジウムの内容は、後日、報告書にまとめ、サロン2002のホームページ上で公開します。主催者に無断で、個人のホームページ、ブログ等に掲載されぬよう、よろしくお願いいたします。

## コーディネーター（中塚義実）より

皆さんこんにちは。高いところから失礼します。

お手元に、A4 判裏表で今回の案内チラシが配られていると思います。今年のテーマは「高校サッカー90年史を語ろう！―戦前の中学サッカーから未来へ」です。東京ヴェルディのご好意で、記者会見後のこの場をお借りして開催できたことを大変嬉しく思います。

サロン2002については、案内チラシの裏側に説明があります（前ページ）。詳しく話すと長くなるのでかいつまんで述べますと、もともとサッカーの研究者の集まりであった、この会の前身となる研究会に、Jリーグ発足や2002年W杯招致活動といった日本サッカー界の盛り上がりの中で、いろんな分野の人が集まるようになった経緯があります。1997年度からサロン2002という名前で活動しております。

毎月やっている月例会は、もう180回を超えております。そして年1回公開シンポジウムを開いています。ここ数年は3月はじめのこの時期にやっており、ちょうどJリーグの開幕とサロンの公開シンポジウムが一緒の時期なので、さあ、サッカーシーズンがまた始まるぞという気分の中でシンポジウムを開いているということです。

今回のテーマの「高校サッカー90年史」ですが、なぜ区切りとしては中途半端な「90年」なのかについてはシンポジウムの中で明らかになってくるでしょう。

演者の方をご紹介します。

日本サッカーを長い間見てこられた、生き字引とも言えるジャーナリストをお二人お迎えしております。お二人ともサッカー殿堂入りされた方でいらっしゃいます。

関西から、サロンのリュックを背負って来られた賀川浩さんです（拍手）。

東京からは、今回ご後援いただいたビバ！サッカー研究会や日本サッカー史研究会を主宰されている、牛木素吉郎さんです（拍手）。

そして、『高校サッカー90年史』の編集長をされている北原由さんです（拍手）。

申し遅れましたが、私は筑波大学附属高校に勤務しております、中塚です。コーディネーターではありますが、今回は私もしゃべらせてくださいということで、よろしく願います（拍手）

シンポジウムの進め方ですが、まず北原さんに、『高校サッカー90年史』を作るに至った経緯、およびその中身について簡単にお話しいただきます。そのあとに牛木さん、中塚、賀川さんの順にそれぞれ25分ずつ時間をとって、戦前の中学サッカーの話をしめます。そこまでは質疑応答の時間はとりません。一気に突っ走ります。そして後半1時間程度、皆さんと意見交換をしながら進めたいと思っております。

それでは北原さん宜しく願ひ致します。

# プレゼン I : 『高校サッカー90年史』 発刊に向けて

北原 由 (『高校サッカー90年史』 編集委員長)

皆さまあらためましてこんばんは。都立高校教員の北原と申します。高体連では高校サッカー一年鑑編集委員ということで、その流れの中から今回、『高校サッカー90年史』を担当することになりました。

高校サッカーの歴史としては、毎日新聞社の岩谷俊夫さんを中心に、『40年史』が作られています。そして、高体連が中心になって、牛木さんにも関わっていただき、『60年史』を作りました。

その時も基本的には『40年史』を踏襲したので、戦前や戦中、全国のさまざまところで大会があったというお話もありましたが、触れる機会がわずかしかなく、発刊に至りました。

けれども、高校サッカーのルーツを探るときにそこが大事だろうということで、90年史では改めて歴史を掘り起こし、戦前の部分も含めて作ることになりました。

90年史制作のきっかけは、2008年1月のサロンの月例会で、元日本テレビ・プロデューサーの坂田信久先生、いまは国土舘大学大学院の先生が「高校サッカーとテレビ放送」についてお話しいただいた時になります。その中で牛木さんが、「90年くらいでしっかりしたものにまとめておいた方がいいんじゃないか」とご発言いただき、そのあたりからいろんな人で話をはじめ、高体連で作ろうという流れになりました。



実は80回るときも考えたのですが、ちょうど2002年W杯のときだったので、いろいろあってできませんでした。高体連の中でそういう編集をするような能力のある人間、昔ほど情熱を持ってやれる人間が減ってきていることもあるかもしれません。昔は都立高校の先生方にも、研修日というものがあるって、時間に余裕を持てる先生がいらっしゃったんですが、今はそういう制度もありません。80回の際には、『高校サッカー年鑑』に、首都圏開催以降のちょっとした記録を載せてお茶を濁した、それを担当したのが私だったということです。

その後、中塚さんを含めていろいろ話していく中で、100年史という節目が一番良いタイミングではあるけど、記録と記憶の消失も懸念され、「ん？皆さん生きてらっしゃるかな？」ということもあって、一旦ここで作っておくことになりました。

そんなこんなで、高校選手権が第 90 回を迎えるこのタイミングで発刊できるようにと作り始めました。内容としては、60 回までの記録の洗い出しと、そこの読み物、こんなことがあったというようなトピックであるとか、そういうところを、今回お越しいただいている演者の方をお願いしながら作っています。

高校選手権のことがメインです。61 回大会以降、今年の第 90 回大会までの 30 回分については、今日も会場に来ていただいておりますが、白髭隆幸さんをお願いして書いてもらっています。この他に、今は女子の方も人気も出てきました。あるいはクラブユースの問題、そういうところも関係する方に頼みながら書いていただいています。

『2012 高校サッカー年鑑』は 2 月 10 日発刊であり、そこに合わせて『高校サッカー 90 年史』を作り上げようと考えたのですが、資料等集めなどいろいろやっているうちに時間が過ぎ、今年の 6 月末から 7 月発行にずれ込んでいるところです。発刊の折りには是非、お買い求めください。

そんなことで、いま作成途中です。作っている中でいろいろ出てきたトピックなどを今日のシンポジウムで取り上げようということになっています。

フロアのご意見も大事にしていきたいと思っています。活発な議論が出来ればと思っておりますので、よろしくお願い致します。

中塚一

シンポジウムを 3 月 4 日にやると決まった時点では、「出版記念シンポジウム」になる予定でしたが、なかなか震災の影響等…本当はないんですけど(笑)、なかなか前へ進まず、6 月、7 月となっています…

それでは、ここからもう少しまとまった時間を取りながら、まず牛木さんから、高校サッカー 90 年を振り返ってのお話をいただきます。よろしくお願い致します。

## プレゼン II : 高校サッカーの 90 年を振り返って

牛木素吉郎 (スポーツジャーナリスト)

みなさんこんばんは。牛木でございます。

実は、先ほどの北原先生が編集長になっている『高校サッカー 90 年史』の原稿をなかなか書かないものですから、遅れてしまって今日に間に合わなかった犯人の 1 人です。が、賀川さんもまだ書かれていないということで (笑)。そのうち賀川さんも書かれると思いますが、私は一応書いてきました (笑)

というわけで、今日は、90 年史に書いたことを、だいたいお話ししようと思っております。

### 1. 「高校サッカー」「高校サッカー史」との関わり

私は 1956 年に新聞記者になりました。その当時は関西で高校選手権が行われていたんですが、ずっと取材してきました。新聞社を辞めてからも毎年見ますので、今年で 56 年間、高校サッカーを取材してきたこととなります。高校サッカー 90 年だとすると、56 年というのは半分以上ですから、半分以上みていることになり、たいしたもんだなど、我ながら思っております。

賀川さんはもちろん私よりも先輩で、しかも関西にお住まいでしたから、70 年くらい高校サッカー、昔の中等学校サッカーに携わっていることになると思います。



二人合わせると 130 年か 150 年になると思うのですが、残念ながら私の方は賀川さんと重なってますので、90 年をカバーするわけにはいかないのです（笑）。

実は、先ほどお話があった『40 年史』というのを、大阪毎日新聞の岩谷俊夫さん、もう亡くなられましたが、岩谷さんが非常に苦労してですね、薄くはないんですけど、ハードカバーではない冊子にまとめました。これが非常に貴重なものになっているわけです。何でもいいから、もととなるものを作らなくていけないと私は思っています。

それで、『60 年史』を作るときに、『40 年史』に継ぎ足して作ろうと提案し、高体連に協力して作り、講談社から出しました。その時に、先ほどちょっとお話ができましたが、戦前の大会は、本当は大阪毎日の大会だけではない、いろいろ、たくさんあったのだが、それが統合されたのだという話が全く出ていません。それはちょっと不公平で、大阪毎日だけ



が、「俺がルーツだ」と主張しているんだけど、それは歴史的事実ではないんじゃないかと。そこを補強しておきたいなと思ったんですね、『60 年史』を作る時に。だけど、調べるのもなかなか大変で諦めまして出来ませんでした。そこで『90 年史』では、全部を網羅できないとしても、そのようなことがあったんだということは入れてもらいたいと思って、『60 年史』に協力してまた『90 年史』に協力するというのを、いまやっているわけです。

いま、日本サッカー史研究会というものを毎月やってまして、どなたでも参加できます。今日おいでになっている福島寿男さんがいろいろお調べになっていることが非常に参考になりまして、今日の話も福島さんから教わったものを受け売りすることになります。

今日の話は大まかに言うと、私がまず 90 年の歴史の概略をお話して、さらに戦前のお話をもう少し具体的に、中塚先生と賀川さんからお話いただくということになっております。90 年を 25 分でお話しするのはなかなか容易ではなく、しかも中塚先生は厳しくてですね、20 分くらいたったらイエローカードを出すと（笑）。ストップウォッチを押して待っているということですので、厳重に 25 分を守りたいと思います。

## 2. 「高校サッカー90年」の歴史的区分

プリントを作っております。「高校サッカー90年史を語ろう！」となっていて、右上にサロン 2002 牛木となっています。この紙に沿ってお話したいと思います。

この紙に載っている事を全てお話しするわけにはいかないのです、大筋において、どんなことがあったのかを知ってほしいと思っております。

90 年の歴史は大まかに、2 つに分けられると思います。

一つは、主として戦前ということですが。中等学校選手権だったころです。

もう一つは戦後。学制改革で新制の高等学校ができました。高等学校選手権になってからの話です。

実は、戦後の大会は、戦前とは全く別の大会だと言ってもいいくらいです。大会に出場している選手の年齢が全く違うわけですから。大会としては歴史を引きずっているわけですが、中身は全く違っていると書いていいと思います。

さらに、戦前の中学校大会は、大きく分けて3つのできごとで分けたいと思います。プリントには、Aの方に中学校大会（旧制）と書いて、そして1, 2, 3としています。

まず最初は大会ができたころの話で、どのようにできたのか。そして2番目には、大会ができたころは、大阪毎日の大会だけでなく、たくさんの大会ができて、多い時は20以上あり、それを統合するということがそのころなされて、現在の大会のルーツである大阪毎日の大会になりました。それ以後は、日本の選手権、中等学校の年代の選手権ということですから、昭和9年が本当の始まりだと言えるかもしれません。そして3番目に、戦争が段々激しくなり、大会は中断されました。中断された後、戦争が終わって復活して、復活してまもなく学制改革となるのですが、その間1~2回、大会が行われています。

そういうことで、戦前のことは3つに分けてお話ししたいと思います。

戦後の高校選手権については、4つのできごとで区切ってお話ししたいと思います。

1つは、学制改革があって大会が変わったこと。名前も高校選手権に変わりました。

2つ目は、夏にやっている高校総合体育大会ができ、そこでサッカーが行われることになり、高校の全国大会は国体を除いて2つになった。けど、そのためのいろいろな問題というのがあります。

そして3つ目に、当時、協会が財政的にも、運営面でも苦しい中でやっていた大会を、日本テレビが助けてやろうと参入し、大々的に応援するという、民放と高体連が協力するような形の大会になりました。大会の性格もかなり大きく変わったということがありました。民放の主導で関西で行われていた大会を、首都圏にもってきました。東京の国立競技場でやるようになりました。これがまた非常に大きな変化だったと思います。

最後に、Jリーグができたことです。Jリーグのクラブは下部組織を持つことになり、U-18の高校生年代のユースのクラブがたくさんできました。そこに良い選手が集まる。それによって、高校サッカーのあり方が変わってきたし、将来も変わっていかなくてはならない。そういう問題があります。

このように、大まかに分けて8つのできごとでお話ししようと思います。全部お話しすることはできないので、面白そうな話を選んでお話ししたいと思います。

### 3. 中等学校大会の始まり

中等学校大会が始まったのは1918（大正7）年です。このころはまだ日本サッカー協会はできていません。できてなかったんですが、サッカーはじょじょに普及し始めた。このようなときにサッカーの大会をやろうという計画が、あちらこちらで出てきました。

大正7年に始まる3つの大きな地域の大会があるんです。1つは関東で行われた「関東蹴球大会」。朝日新聞社が後援して、実際の運営面は東京高等師範、今の筑波大学が引き受けてやったという大会です。

中部地方、愛知県では、新愛知という新聞社がありました。戦時中の統合でいまの中日新聞の一部になっているのですが、新愛知新聞社の主催で「東海蹴球大会」が行われていた。これは、第八高等学校

が運営面を担当して、他の学校も協力してやるというものでした。第八高等学校というのは旧制高等学校で、学校の制度が変わったのでわかりにくいのですが、今の大学の教養学部程度の学校があって、その八番目の学校は名古屋にあったということです。いまは名古屋大学に吸収されています。

そして3つ目は、大阪毎日がやった「日本フットボール大会」です。

こういう大会は、実はこの3つだけでなく、各地でいろいろ行われていました。そして非常に大きな特徴は、協会がないわけですから、上級学校が協力して運営していたということです。上級学校というのは当時の高等学校、つまり旧制高等学校、それから高等専門学校（たとえば、高等商業学校、高等工業学校）などがあるわけで、そういうところは協会に代わって運営の主体となって行われていました。

そういうわけで、はじまったときから中等学校大会というのは、学校とマスコミの両方に深く関わってスタートしているということが一つの特徴だと言えます。東京高等師範がどのように関わったか、あるいは大阪毎日でやった日本フットボール大会がどのようにやったのかについては、中塚先生や賀川さんからお話があると思います。

ここで、ぼくが1つだけ邪推というか推測していることがあります。その当時始めた人たちは、実際は近隣の学校を集めて大会をやっているのですが、学校の大会として考えていたとは必ずしも限らない。やっていたのはほとんど学校のチームが集まっているわけですが、全日本選手権をやるつもりでやっていたんじゃないかと。たとえば大阪毎日の大会は、はじめから「日本フットボール大会」ということで、「日本」とつけていた。実際に集まったのは関西の近隣の8校だけだった。関東の方は「関東」とつけてますけど、このあと東京高師主催で、「日本蹴球大会」と「日本」と名がつきます。名古屋の方ものに「日本」とつけています。そのようなことで、まあ日本を統一するための、織田信長のような、豊臣秀吉のような気持ちでやっていたのではないかと思うところがあります。これがまあ最初の方の大会の始まりであります。

#### 4. 全国大会への統一

先ほど20以上あったと申しあげましたが、これは福島さんから教えてもらったんですが、『蹴球年鑑』というイヤーブックが1932年に出てまして、それには22の大会が収録されている。かなりバラバラにあったということですね。これが全国大会に統合されたのが昭和9年です。昭和7年ごろから統合しようという動きがあって、いろいろもめた末に最終的には大阪毎日の大会に統合された。いろいろ抵抗もあって、それでも関東の大会はやるんだとがんばったことも伝えられております。

なぜ大阪毎日の大会に統合されたかという、ぼくははっきり証拠を持っていませんが、少なくとも大阪毎日の大会は大正15年ぐらいから予選をやっているんですね。予選を勝ったチームが全国大会に出場するということになっているので、まあ全国大会の体制を持っていた。他の大会は、東京高等師範、いまの筑波大学がやっていた中等学校選手権でも、予選なしの招待大会です。予選から本大会へという形ができていたということが、大阪毎日の大会に統合された一つの理由であります。

もう1つの背景としては、じょじょに日本も軍国主義的、統制的になってきました。それで文部省から、バラバラにやるのはいかん、統制しろ、と指示が出るわけです。統制を目指しての統合、文部省からの、政府からの圧力があつたのではないかと思います。野球の方も弊害が多く、野球も統制しようということで野球統制令になったんですが、そういうものの影響もあつたかもしれません。

## 5. 戦前の中学大会の特徴

このころいろんな大会が、上級学校主導で作られたときに、1つの背景としてですね、サッカーというスポーツが、教育に非常にいい。野球ではなくてサッカーがいいということが論議されまして、サッカーが行われたということがあります。それともう1つ、東京高等師範は中等学校の先生を養成する学校なんですね。いまの筑波大学です。その学校の卒業生は、各地の中学の先生や、校長先生になる。あるいはそういう中等学校の幹部になる。そういう人たちの頭の中に、イギリスのパブリックスクール、たとえばイートン、ハーローなどのイメージがあって、そのいいところを見て、ああいうふうな教育がしたいなあということがあります。当時のパブリックスクールは全寮制ですね、そして寮の対抗戦としてフットボールが行われる。このフットボールは、いまのものとは違って、各学校がルールを作ってたのですが、それによってイギリスのエリート層の指導者が育てられていった。そういうことを実際以上に信じていて、そういうことを真似しようという気持ちがあったと思います。そしてそういう人たちが配置されていったのが中学校や師範学校なんですね。

中学校や師範学校というのエリート教育なんです。当時の学校制度はいまとはまったく違ってまして、小学校6年が義務教育です。学校教育一覧表みたいなのがありますが、ご覧になるとわかりますが、小学校6年までが義務教育で、卒業するとほとんどの人が就職するんです。中等学校への進学率は非常に低い。年によって違いますけど5%前後なんです。その少ない中等学校から、中学校と実業学校へ分かれるんです。2つの方向にです。それで中学の方は、卒業後には旧制の高等学校を経由して大学に行く。あるいは師範学校に。ちょっと年代は違うんですけど、上の方に行く。でも実業学校は、商業学校、工業学校、農業学校なんですけど、この人たちは卒業するとすぐに就職する、親の仕事を継ぐというような学校制度です。

それでサッカーは、師範学校、エリート教育の方にだけ普及していった、商業や工業にはあまり普及していなかった。そのために戦前のサッカーは非常に少数、エリート層のスポーツということになってしまった。良いところもちろんあって、優れた人たちがサッカーになじんで社会の中核指導者になるわけですから、比較的いいスポーツだとして広まったことがあります。しかし、野球のように大衆化することに非常に遅れたというマイナス面もあります。

戦前の中等学校大会のもう一つの特徴は、中学校と師範学校が混在して大会に参加していたことです。中学校よりも師範学校が複雑で、師範学校に行く人はいっぺん仕事についてからいく人が多く、年齢的には少なくとも2年以上の差になる。するとどうしても中学校は師範学校にかなわない。ですので、戦前の優勝校をみると、師範学校の方が多いということがあります。確かに不公平ではあるんですけども、技術や戦術の進歩に役に立ったということもあるかと思います。この話は賀川さんからもう少し詳しくお聞きできると思います。

これがまあ戦前の中等学校の1つの特徴ですね。

## 6. 戦争による中断

戦争が近づいてきて、昭和16年から戦争による中断があります。この年の12月に真珠湾攻撃があって、太平洋戦争に拡大した年なんですけど、その年から早くも大会は中断させられました。それで昭和16~17年、太平洋戦争の1~2年目、というか太平洋戦争になる直前ですね。ほぼ全ての大会が中止させられます。唯一の例外が樫原神宮大会で、ここで中学校の大会が行われています。昭和18年、太平洋

戦争の3年目には、文部省の通達で、あらゆる学校スポーツの大会は中止にさせられる。こっそりやっている例はあるんですけど、記録には残っていないわけです。

このように中断していた期間は、戦争が長かった割には短いと言えるし、逆に大学のスポーツは昭和18~19年と2年間しか禁止されていないのに、中学校は昭和16年から禁止されるのは長いなど言えると思います。昭和16年に中止されるんですが、この年に優勝した学校は優勝旗を持って行きました。優勝校は、当時日本の植民地だった朝鮮の普成中学です。優勝旗を朝鮮半島に持って行ったんです。その後、戦争が終わったあとで韓国は独立しましたから、優勝旗は戻ってきませんでした。そして朝鮮戦争がありましたから、どこにいったかわからなくなってしまった。ということで戦前の優勝旗はなくなってしまったというエピソードがあります。

## 7. 戦後の復興期—学校制度改革の影響

戦後は比較的すぐに復興しまして、終戦の翌年には西宮で招待大会が開かれています。そしてその翌年には旧制の中等学校大会が復活しました。このころにぼくは非常に興味を持っています。戦争中、当時中学1年生だったんですが、食べるものもなにも足りない時代です。そんな苦しい時代にどうしてボールがあったんだろうと思ったんですよ。シューズはま裸足（はだし）でもできますけど、ボールはどうしていたのか。いろんな人に聞いているんですけども…。

このころの話をもう1つします。片山洋という、慶応から三菱に行ってメキシコ・オリンピックで銅メダルをとった選手がいます。彼も、彼のお父さんもおじさんもみな慶応です。生まれたのは戦争中です。でも慶応に電車で通わせることができない、だから近くの第一師範の附属小学校に入ったんですね。そして戦争が終わったときに、その附属小学校は焼けていなかった。だから学校にはボールがあって、休み時間にはみんなでボールを蹴ったというようなことでした。

戦後の高校選手権のことで非常に重要なことは、学制改革によって、従来の中学が新しい新制の高等学校になった。小学校はそのままあります。そして小学校卒業後の3年間、中学1年から3年まではどうなったかという、これは全国でほとんどまったく新たに作られたんです。例えば県立浦和高校は、浦和中学、昔からサッカーの伝統のある中学ですが、それが新制高校になりました。ですから旧制浦和中学の伝統は新制浦和高校に引き継がれていきます。じゃあ新制の中学はどうかというと、浦和にもたくさん新制中学ができましたが、みんなサッカーの伝統はないところから始まります。これがサッカーだけでなく、いろんなスポーツで空白期間を作ってしまう。これが非常に大きかったと思います。

ただ、維持されたというか生き残ったのはなぜかと言いますと、たとえば、きょう来ている浅見俊雄さんは、昭和27年の大会で新制浦和高校で優勝されています。でも入ったときは旧制の浦和中学です。そして途中で新制の浦和高校になって3年間やりましたから、浦和中学・高校に6年間いたわけです。いまでは中学が3年間、高校が3年間ですが、同じ伝統のあるところに6年間もいましたから、それによってサッカーの伝統を維持することができたわけです。

もう一人、きょうは、会場に松永章さんがおられます。松永さんは、藤枝東がサッカー王国だったときのエースですね。ぼくの考えでは戦後のストライカーは、松永、釜本が双璧だったと思います。松永さんは完全に戦後派ですから、新制の藤枝東高校に入った。藤枝東は戦前の志太中学の伝統があるところですから、その伝統が地域に受け継がれていったということになります。こうやって浦和や藤枝でサ

サッカーの伝統が残っていった。それで戦後の高校選手権で強いところは御三家と呼ばれ、浦和、静岡、当時は藤枝、そして広島です。これは3つとも旧制中学の伝統が地域に残っていったからだと思います。これはとても興味深いものだと思います。

しかし、その後は、中学校ではスポーツをやっていなかった人たちが高等学校からスポーツを始めましたから、サッカーが普及するまでには非常にレベルが伸び悩みました。メキシコ・オリンピック以降、日本のサッカーは低迷期だといわれていましたが、一つの原因は、戦後の学制改革で中学のサッカーに空白があったことだと思います。

その後、高校総合体育大会ができました。そのため、夏の高校総体は高体連がやり。冬の高校選手権は日本サッカー協会がやるというようになりました。そのため、高校サッカーで、2つの勝ち抜きトーナメントが行われています。

日本サッカー協会が、苦勞して高校選手権をやっているときに、民放テレビが参入して経済的には非常に助かる。けれど、延長戦なしでPK戦をやるなど、テレビ主導での運営の変化がありました。

そしていま、Jリーグができてから、クラブユースが高校サッカーとどういう関係にあるかなどという問題が生まれています。

ということで、だいたいの90年のおさらいということでございます。

中塚:ありがとうございました。90年の歴史を25分でお話しいただくのは至難の業だったと思います。

お手元にレジュメがありますので、それで補足して頂き、最終的には『高校サッカー90年史』の書物になりますので、それをお買い求めいただき、読んでもらえればと思います。

スポーツ文化研究会「サロン 2002」公開シンポジウム

「高校サッカー90年史」を語ろう！

—戦前の中学サッカーから未来へ—

2012年3月4日(日) 16時30分～ 味の素スタジアム会議室

「中等学校サッカーの歩み」

牛木素吉郎

【お話ししたいこと】

大会 90年の歩み 2つのテーマ

- ①学校制度とスポーツ
- ②スポーツの普及と学校

## A. 中等学校大会（旧制）

### 1. はじまりは各地。1918年（大正7年）

#### ①上級学校と新聞社が協力した。

関東蹴球大会……………東京蹴球団（東京高師系）、朝日新聞社後援

東海蹴球大会……………第八高等学校（旧制）、新愛知（のちの中日新聞）主催

日本フットボール大会……………大阪毎日新聞社主催

- ・ほかにも多くの大会が次々に生まれた。

『蹴球年鑑』1932年版には23の大会が収録されている。

#### ②それぞれ「全国大会」をめざしていた。

### 2. 全国大会への統合 1934年（昭和9年）

#### ①大阪毎日の大会に統合、中等学校の全国選手権とした。

- ・大毎の大会（全国中等学校大会）は地区予選を経た選手権になっていた。

関東の全国中等学校大会（東京文理大＝東京高師主催）などはオープン参加だった。

- ・文部省の統合方針があったと思われる。

#### ②戦前の中等学校サッカーの特徴

- ・エリート教育の学校（中学校と師範学校）が主力だった。

英国のパブリック・スクール教育への「あこがれ」があった。

実業学校（商業、工業、農業）への普及は遅れた→大衆化への出遅れ

- ・中学と師範の混在が、技術、戦術面の進歩をうながした。

キック・アンド・ラッシュとショート・パス戦法

### 3. 戦争による中断と戦後の復活

#### ①戦争による中断 1941年～1946年＝昭和16年～21年＝

- ・戦前最後の優勝は朝鮮（当時、日本の植民地）の普成中だった。優勝旗は戻らなかった。

- ・1941年（昭和16年）年に樫原神宮競技大会、1942年（昭和17年）に明治神宮競技大会で中等学校蹴球競技が行われた。

#### ②戦後の復活（1945年～1948年＝昭和21年～23年）

- ・1946年（昭和21年）8月に西宮で関学主催の招待大会。毎日後援。（回数に入れていたこともある）

- ・翌年、1947年（昭和22年）12月に「全国中等学校選手権」復活。最後の中等学校大会。

- ・用具（ボールとシューズ）をどうやって調達したか（東京の例）。

- ・外地からの引き揚げ者子弟による普及（新潟の例）

## B. 戦後の高校選手権（新制）

### 4. 学制改革により「高校選手権」と改称（1949年＝昭和24年）

#### ① 6：3：3制

- ・中等教育の前半（新制中学3年間）が義務教育に。旧制中学は新制高校（3年制）に。
- ・新制中学は全国で、まったく新たに作られた。
- ・12歳～14歳の年代の学校スポーツは、まったく伝統のないものになった。

#### ② 「高等学校選手権」としてのスタート。第27回大会から。

- ・初期は旧制中学以来の伝統校がレベルを維持。  
1952年（昭和27年）までは旧制中学に入学し途中で新制高校になった伝統校がレベルを維持（広島一中→鯉城、浦和中→県立浦和高など）。同じ学校に6年間在籍。
- ・1953年（昭和28年）以降は、高校になってからボールを蹴り始めた選手が大多数に。  
中高一貫だった旧師範学校（→新制大学）の附属高校と私立が有利に。

#### ③ 復興期から普及期へ

- ・戦前の旧制中学からの伝統校がトップレベル。「ご三家」（埼玉、静岡、広島）。
- ・普及が新興校の台頭を促した。1958年（昭和33年）の秋田商優勝以後。
- ・高校教員による強化が始まった。 藤枝東・長池監督、習志野・西堂監督……

### 5. 高校総合大会の創設（1966年＝昭和41年）

#### ① NHKによる働きかけに高体連が応じる。

- ・夏休みに、陸上、水泳などの高校選手権を1県で総合集中開催。
- ・毎日新聞後援のサッカー、ラグビーに夏に移るよう働きかけ。
- ・高体連サッカー部は、夏に移ることを決定。毎日新聞が撤退（ラグビーは冬に残る）

#### ② 日本サッカー協会が独自の「高校選手権」

- ・協会は独自に正月の関西で「選手権」大会を続ける（小野卓爾常務理事のがんばり）
- ・高体連は関与しない（当時、全国大会は国体を除き年1回とされていたため）
- ・回数をはずし「昭和\*\*年度」に。
- ・協会は財政、運営で苦しみながら続ける。
- ・1980年（昭和55年）度から高体連が復帰。回数を復活。

### 6. 民放テレビの参入

#### ① 日本テレビが中継、後援を申し出る（1970年度＝昭和45年度）

- ・1970年度大会を日本テレビ系が全国に中継（決勝はNHKと並び）
- ・1972年（昭和46年）度大会から、日本テレビと系列局が後援（のちに共催）に。

#### ② 新しい試み

- ・テレビ、スポンサーが大会運営に関与。
- ・テレビの全国系列化、スポーツの商業化が背景に

### 7. 首都圏開催（1976年＝昭和51年＝度～）

#### ① 日本テレビ主導で移転

- ・関西では観客数が伸びない。人気が出ない。

#### ② 民放テレビ主導の功罪

- ・人気急上昇、全国的なレベルアップ、財政面の強化。
- ・運営方式をテレビの都合に合わせる（延長なしのPK戦導入など）

### 8. Jリーグ発足後の問題（1993年＝平成5年＝～）

#### ① ユースクラブとの関係（強化と普及）

#### ② 「選手権」と「総体」の位置づけ（短期勝ち抜き戦の弊害＝リーグ方式導入の必要）

#### ③ 女子サッカーの登場



# プレゼンⅢ：日本サッカーのルーツ校 東京高等師範学校

中塚義実（筑波大学附属高等学校／サロン 2002 理事長）

続きまして私です。いつも進行役ばかりやっていてあまり喋るチャンスがないんですけど、テーマがテーマですし、私の勤務している学校も、私の母校も大いに関係しており、『高校サッカー90年史』でも、「日本サッカーのルーツ校、東京高等師範学校」というタイトルで原稿を書かせてもらっていますので、ここでも話をさせていただくことになりました。

お手元に A4 判の資料があります。牛木さんのようにコンパクトなレジュメにしようかと思ったんですが、講談社に提出した原稿そのものを印刷して持ってきました。実はせっかく作ったのですが、ちょっと長すぎるといっているので削らないといけないんです。そうすると削られた部分は目の目を見なくなってしまいますので、このシンポジウムでは参加者にそのままお配りにしました。

## 1. 自己紹介を兼ねて—母校「筑波大学」と勤務校「筑波大学附属高校」

自己紹介を兼ねてもう少し補足させていただきます。私は 1980 年に筑波大に入学しました。サッカー一部員です。風間八宏が同期です。私の 2 つ上の先輩は 20 人以上いましたが、卒業後、ほとんどみな教員になりました。1 つ上の先輩たちから少しずつ企業に進む人が現れ、私の代になると半分半分でした。今では一学年 40~50 人いますが、教員になれるのは 3~4 人いるかいらないか、そういう状況です。

そういう意味で、私は過渡期にいたのだと思います。高等師範からの教員志望の流れが私のころにはあったし、日本のサッカーは我々の先輩たちが各地にゴールポストを立てたところから始まったのだ、という話は昔から聞いていました。

大学院を卒業してすぐに赴任した学校が筑波大学附属高校、高等師範の附属です。この学校の先輩たちも、いつまでたってもボールを蹴ってるんですね。年 1 回の OB 総会、桐窓サッカー倶楽部というのですが、そこには 60 歳、70 歳、80 歳ぐらいの人たちが出てきて、スライドを使って、いついつ神戸一中の人たちとボールを蹴ったとか、浦和中、



湘南中とボールを蹴ったとか、そういう話をすごく得意げにされている。こういう人たちはいったい何なんだろうって思いながら、自分に課せられた高等師範学校及びその附属の歴史を紐解いている次第です。

## 2. 高校選手権出場校一覧からわかること—東京高師が学校スポーツのルーツ

お手元に、高校選手権の出場校一覧があると思います。この一枚目（pp18-19.『2012 高校サッカー一年

鑑』より引用)が、戦前から戦後すぐのところなのですが、現在までつながるこの大会のルーツは関西で行われていた大会だとされています。ですので、この表の左の方は、関西の学校しか出てきません。

それから第10回大会、昭和に入ってから最初の大会で、ソウジツ(崇実)って書いてある学校が優勝しています。スンシル中学と読むそうですが、ここは朝鮮半島代表です。先ほども話がありましたけど、第9回大会から全国予選を勝ち上がったチームが出てくる大会といなり、当時日本の植民地だった朝鮮半島の代表が出場していたわけです。第9回の培材(ベジェ)中学はソウルの学校、その次の崇実中学はピョンヤンの学校ですね。キリスト教系の学校で、その後廃校になってしまったけど終戦後に南側へ移り、今もあるそうです。この話を年末、茗友サッカークラブ(筑波大学蹴球部同窓会)関係者の高校選手権出場監督激励会の席で紹介したところ、「うちの学校、そこと試合やってるよ」っていう話がありました。広島山陽高校です。向こうに行ったときに、向こうの学校の先生から「戦前の日本の大会で優勝したことがある」という話をされたそうです。ああそれがこのことかって話が繋がったようです。

それから、出場校あるいは優勝校をみたときに、先ほどの話と重なりますが、師範学校、中学校のオンパレードです。高校野球の同じ表を見たら、その違いがたぶんわかると思いますけど、高校野球は〇〇商業とか△△実業が多いのです。サッカーは全国の師範学校や中学校に広がっていたということです。こういうことから高等師範の卒業生の貢献が見えるのではないかと思います。

お手元のA4の資料に沿ってポイントだけ押さえておきます。学校スポーツ、それは東京高師から始まった。サッカーだけじゃないと感じています。日本がこれだけ学校スポーツが盛んなのは、やはり高等師範の卒業生の貢献が大きい。誰がルーツなの?となると、嘉納治五郎に行き着きます。柔道の創始者であり、日本で最初のオリンピック委員、日本体育協会の創設者であるだけでなく、嘉納治五郎は東京高等師範の校長を長く務めた教育者です。1893年に校長となり、高等師範の教育に、かなり強烈に身体活動を導入しました。1896年に運動会を組織し、学生はみな、体育の学生だけじゃなく、放課後必ず30分はいろんな部に所属して身体を動かせということになり、その中にフットボール部があります。我々はこれを筑波大学蹴球部の出発点としています。1896年です。バルセロナよりもレアルマドリードよりも古いです(笑)。

さらに1901年に、それまでの運動会と学生宿舎を統合する形で校友会を組織、ここでメンバーシップをともなう今日の部活動につながっていくのです。「当時の学生は柔剣道のいずれかを履修し、春と秋に長距離を走り、夏には2週間の水泳実習を行い、秋に陸上大運動会に参加、そして校友会活動にも参加する」。体育以外の学生も含め、みなこうだったわけです。そして卒業後、全国の師範学校や中学校に赴任し、各地で校長先生になっていくわけです。赴任した学校で、運動会をやり、水泳実習をやり、体育館を作り、部活をしっかりやる…。全国各地の学校が、このような形で学校スポーツに取り組むようになったのは、東京高師の卒業生の貢献ですし、その原点には嘉納治五郎の教育があったと感じています。

### 3. 日本で最初のサッカーの対外試合(東京高師対YC&AC)と卒業生による普及

そこで日本で最初のサッカーの対外試合という話になるんですが、これは別のところでも話しましたし、サロン2002及び日本サッカー史研究会で『熊野の中村覚之助』という冊子にまとめています。まだ残部がけっこうあるんですけど、ちょっと重いので今日は2冊しか持ってきていません。1部500

円でお配りします。先着順です（笑）。

欧米の視察から帰ってきた坪井玄道先生が、欧米から何冊か書物を持ち帰ります。その中に様々なスポーツが紹介されているものがあり、サッカーの記述もありました。それを、和歌山県那智勝浦町出身の中村覚之助さんが中心になって訳して、一冊の本にまとめました。それが日本で最初のサッカーの本であり、その本をもとにして練習を開始したのが 1902～1903年のことです。練習だけじゃ物足りないので試合をやろうよということになります。当時サッカーをやっていたのは外人さんです。横浜外人クラブ（YC&AC）と試合をやりました。それが日露戦争直前の 1904 年 2 月 6 日のこと。その翌日の写真が、資料にあるものです。こういうエピソードからしても、やはり中村覚之助という人物をもっともっと我々はクローズアップしなきゃいけないなと感じています。



日本初のサッカー試合（1904年2月6日）：東京高師 vs YC&AC  
（後列右から2番目の制服姿が中村覚之助）

表1. 明治～大正期の東京高等師範学校蹴球部員の赴任先（ごく一部）

学校名(当時)	学校名(現在)	指導者名	学部卒業年
愛知第一師範	愛知教育大学	堀 桑吉	明治39(1906)
滋賀師範	滋賀大学	新帯 国太郎	明治41(1908)
埼玉師範	埼玉大学	細木 志朗	明治41(1908)
広島高師	広島大学	牧野 信寿	明治41(1908)
豊島師範	東京学芸大学	内野 台嶺	明治42(1909)
滋賀師範	滋賀大学	落合 秀保	明治42(1909)
御影師範	神戸大学	玉井 幸助	明治42(1909)
広島一中	国泰寺高校	松本 寛次	明治44(1911)
刈谷中	刈谷高校	高橋 英治	大正3(1914)
静岡師範	静岡大学	北村(藤井)春吉	大正9(1920)
湘南中	湘南高校	後藤 基胤	大正13(1924)

そして、中村覚之助の後輩たちがその後も練習を続け、そのうち横浜外人クラブにも勝てるようになり、そのことが新聞でも取り上げられ、フットボールを教えてくれという依頼が東京高師に来るようになり、

なります。在校生、卒業生が、栃木師範、群馬師範、青山師範（今の東京学芸大）といったところに巡回指導に行ったり、卒業後に各地へ赴任してサッカーを広めた。先ほど浦和、広島、静岡という話がありましたが、それら御三家も高等師範の卒業生が最初に赴任してサッカーの種をまいているわけです。

表1には、その頃の卒業生がどこに赴任してサッカーの種をまいたのか、堀桑吉が愛知第一師範。新帯（にいのみ）国太郎が、落合秀保とともに滋賀師範。細木志郎、埼玉サッカーの父ですね、埼玉師範。牧野信寿が広島などなど。ここに挙げた方はごく一部ですが、こういった方々が各地の師範学校に赴任したわけです。

師範学校というのは小学校の先生を養成する学校ですが、多くの場合附属小学校が併設されているわけです。例えば御影師範にサッカーがもたらされると、その附属小学校の子たちは小学生のころからサッカーをやり始めることとなります。そして、御影師範附属小学校の子たちが卒業して神戸一中に入り、戦前の神戸一中全盛期を形成する。このあたりは賀川さんからお話があると思いますが、その基礎となった、出発点になったのが東京高師の卒業生だということです。

#### 4. 関東蹴球大会と東京高師主催大会

先ほども話がでましたが、当時は野球が No1 スポーツだったのですが、どんどん過熱化し、大会が乱立していきます。「それやりすぎだよ」ってことで、野球統制令につながります。1932年です。それが後に蹴球大会の統一につながっていくのですが、その前に、全国規模の競技会が乱立した時代に、各学校が目標とする大会がいくつかあったということです。

日本代表が最初に編成され、国際試合をやったのは1917年の極東選手権とされています。この時の日本代表は東京高等師範です。中国に0-5、フィリピンに2-15と大敗し、これではいけないということで、各地の新聞社や学校が立ち上がり、関西、東海、そして関東で、翌1918年に大会が始まります。その中の関西大会ー日本フットボール大会が、今の高校選手権につながるわけです。

ですが、当時の状況から察すると、むしろ東京でやっていた「関東蹴球大会」の方が規模も大きく、きちんと運営されていたようです。日本のサッカーのルーツ校、東京高師が仕切っているからきっちりした大会になるのは当然です。主催は東京蹴球団です。これは東京高師、青山師範、豊島師範の卒業生を中心に内野台嶺が中心になって組織されたクラブなんですけど、実質的には内野さんが大会委員長として運営にあたったようです。大会の名誉会長は嘉納治五郎で東京高師校長、大会会長永井道明は東京高師体育主任です。つまり、関東蹴球大会は、最初から東京高師関係者の肝入りではじまったのです。そして、東京でやるものですから、皇族や各国大使も大勢訪れたという記録があります。その中にイギリスの大使の方がおられて、その方とその側近の方がイギリス本国に、日本でもサッカーの全国大会の予選が始まったのでなにかカップを…、ということでFA銀杯の話につながってくるわけです。

ただし、この大会はその後、東京高師の手からちょっとずつ離れて行って、本当に東京蹴球団の主催大会という形になっていきます。じゃあ東京高師はその後どうしたのかというと、もちろん全国各地に指導者を輩出しているんですが、一方で、東京高師が主催して「ア式蹴球全国大会」を開催しています。大正13（1924）年から1932年まで、9回にわたって開かれています。

先ほどの牛木さんの話にも、当時上級学校がいろんな大会を主催していたという話がありましたが、その中の一つです。おそらく最も大きな一つじゃないかなと思います。東日本のほとんどの学校は東京高師主催の「全国中等学校蹴球大会」を目標にやっていたようです。これについてはいろんな意見があ

ると思いますが、関東蹴球大会や日本フットボール大会と違って、師範の部と中学校の部を分けて行っているんです。ですから、日本フットボール大会だと2歳ぐらい年上の師範学校が優勢になるんですが、中等学校の部と分けて行っているもんですから、高師主催の大会の方は中学校が優勝するわけです。9回の大会中、7回は東京高師附属中が優勝しています。第1回大会は学校の都合で出させてもらえなかったもので、出場した8回のうち7回、附属中が優勝しているということになります。北は北海道から西は京都あたりまで参加している大会なので、そういう意味では全国規模の大会と言えますが、一回だけ優勝を逃したときにどこが優勝したかという、先ほどもご紹介ありましたが、松永章さんの母校の志太中、今の藤枝東ですね。志太中のサッカー部史を見せてもらいますと、やっぱりこの優勝のことがかなり大きく取り上げています。それだけ皆が注目していた大会だったんだということですよ。

ただこの大会も終わってしまいます。関東蹴球大会が終わると同じ理由。先ほども出てきた「蹴球大会の統一」という話です。1932年の野球統制令の影響が他の種目にもかなりあったようです。上級学校が主催する大会への参加が制限され、学校以外の組織が開催する大会への参加も制限されます。上級学校である東京高師主催の大会への参加や、東京蹴球団といういちクラブが主催している関東蹴球大会への参加は、学校としてはだんだん難しくなっていくわけですね。そういう中で大会が終わりになり、代わりに、関東蹴球協会が主催する大会が別途立ち上がるような形になるのですが、そのうち戦争の足音が忍び寄り、状況は大きく変わっていく。それが戦前の大きな流れかと思います。

## 5. 東京高師附属中とサッカー

「東京高師のグラウンドでは附属中がおおらかにサッカーを楽しんでいた」と書きました。今でこそ筑波大学は茨城県の奥地に(笑)ありますが、附属は東京都文京区に残っています。最近の高校生は「附属」と言わないんです。「筑附(つくふ)」とか、ひどいものになると「筑波高校」という者もいます。「筑波県立筑波高校とどう違うんや？」というんですけど、附属の誇りがどんどん失われているのと、筑波大学のインパクトが強いのでしょうか。大学と離れているため附属としての存在意義が問われているいまこそ「附属」を強調する必要があると思いますが、当時は同じところにあったので、存在意義などは問題になりません。

JRの御茶ノ水駅を出て、神田川をはさんだ反対側に東京医科歯科大学があるのはご存知だと思いますが、あそこは女子高等師範(いまのお茶の水女子大学)があったところで、そのちょっと湯島聖堂以上に高等師範があり、そこに附属学校もありました。そこが手狭になり、高等師範が、今の茗荷谷からちょっといったところ、旧東京教育大学があったところに移転します。1903年です。中村覚之助がいたところで、彼を中心に雑木林を開墾してグラウンドづくりに励んだという記録があります。移転当初は附属中とは別々になったのですが、1910年頃からは附属中も移転します。茗荷谷からちょっと行った、いま教育の森とか文京区スポーツセンターがある辺りの話です。附属小学校はその裏手に、昔からずっとあります。

で、高等師範が日本で最初にサッカーを導入して練習していた、まさにその同じ敷地に、附属の子たちがいたわけです。教育実習生として来る人もいたでしょうし、学校の行き帰りでお兄さんたちがボールを蹴っているのも見たこともあるでしょう。

私はいつもうちのサッカー部員に言うんです。「お前たちの先輩は、日本で一番最初にサッカーボールに触れた青少年たちなんだ」と。それはたぶん間違いのないと思います。ついでに言うと、ビルマ人の

チャー・ディンさんの話も、全国に指導に出かけたのでいろんなエピソードがあるんですけども、これも出発点は附属です。ビルマから、いまの東京工業大学に留学していた彼の下宿先は、飯田橋神楽坂のあたりにあったらしく、ひょんなことから高等師範のグラウンドでサッカーやっていると知った彼は、ちよくちよくボールを蹴りに来るようになったと。そうするとものすごく上手なので、附属の子たちも教えてもらうようになったと…

表 2. 1930 (昭和 5) 年 第 9 回極東大会 日本代表

ポジション	氏名	生年月日	出身中学	出身高校	出身大学	試合出場	
						フィリピン	中華民国
監督	鈴木 重義	1902(明治35)年10月26日	東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	-	-
FW	春山 泰雄	1906(明治39)年4月4日	東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大	○	○
	若林 竹雄	1907(明治40)年8月29日	神戸一中	松山高校	東京帝国大	▽	▽
	手島 志郎	1907(明治40)年2月26日	広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
	篠島 秀雄	1910(明治43)年1月21日	東京高校尋常科	東京高校	東京帝国大	○	○
	高山 忠雄	1904(明治37)年6月24日	神戸一中	第八高校	東京帝国大	○	○
	市橋 時三	1909(明治42)年6月9日	神戸一中	慶応大予科	慶応義塾大	△	△
	HB	本田 長康		東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	▽
竹腰 重丸		1906(明治39)年2月15日	大連一中	山口高校	東京帝国大	○	○
野沢 正雄			広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
FB	竹内 悌三	1908(明治42)年11月6日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大	○	○
	井出 多米夫	1908(明治42)年11月27日	静岡中	早稲田高等学院	早稲田大	△	
	後藤 鞠雄		関西学院中		関西学院大	○	○
GK	斉藤 才三	1908(明治42)年9月24日	桃山中		関西学院大	○	○
sub							
HB	西村 清		神戸一中	松山高校	京都帝国大		
	大町 篤				東京帝国大		
FB	杉村 正二郎	1907(明治40)年8月16日	天王寺中	早稲田高等学院	早稲田大		
	近藤 台五郎		東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大		
	岸山 義夫			第八高校	東京帝国大		
GK	阿部 鵬二	1909(明治42)年1月27日		浦和高校	東京帝国大		

注) 試合出場欄は、○フル出場、▽途中退場(交代)、△途中出場

そんなところが出発点にあったようで、最初に食らいついていった一人が鈴木重義さんです。表 2 は、かなりマニアックな資料で、牛木さんの主宰されている日本サッカー史研究会で配布された資料に加筆したものなのですが、1930 年の第 9 回極東大会日本代表の監督が鈴木さんです。東京高師附属中を卒業して、早稲田高等学院、早稲田大学の前身ですね、早稲田大学でサッカーを始めて、サッカーをずっと続けて、日本代表にもなられて、この時にはもう監督になられている。ベルリン五輪の時の監督でもいらっしやいます。

このメンバー表を見ても、何人か附属中の方がおり、それから神戸一中や広島高師附属中、こういった方々が当時の中心選手でいたことがわかります。表 3 は、明治～大正期の東京高師附属中蹴球部卒業生の動向ですが、今村次吉さん、日本蹴球協会初代会長も附属の卒業生です。それから、新田純興さん、東大サッカー部の生みの親ですね。あるいは、明治大、早稲田大、立教大…そういった様々な大学のサッカー部の出発点を、附属の卒業生が作っていったのだということを忘れてはなりません。

茗荷谷のあの周辺で起きた、あの辺りが震源地になって全国に広がっていったということがわかるのではないのでしょうか。

表 3. 明治～大正期の東京高師附属中蹴球部卒業生の動向（ごく一部）

氏名	卒業年	備考
★今村 次吉	明治30(1897)	東京帝大。大日本蹴球協会初代会長
★新田 純興	大正4(1915)	旧制一高、東京帝大でサッカー一部創設。 大日本蹴球協会創設に尽力
井染 道人	大正9(1920)	明治大でサッカー一部創設
中島 道雄		旧制水戸高でサッカー一部創設。のち東京帝大
★鈴木 重義	大正10(1921)	早稲田大でサッカー一部創設。ベルリン五輪代表監督
峰岸 正雄		立教大でサッカー一部創設
岸本 英夫		東京帝大でサッカー一部創設
春山 康雄	大正13(1924)	旧制水戸高を経て東京帝大。日本代表として活躍
本田 長康	大正14(1925)	早稲田大。日本代表として活躍
近藤 台五郎		旧制水戸高を経て東京帝大。日本代表として活躍
西川 潤之	大正15(1926)	法政大。日本代表として活躍
竹内 至		旧制新潟高でサッカー一部創設。京都帝大卒業後、東京瓦斯サッカー一部創設
★島田 秀夫	昭和8(1933)	東北帝大卒。日本サッカー協会第7代会長
★は日本サッカー殿堂掲額者		

ということで、戦前の話ですが、東京高等師範の卒業生、そして附属の卒業生が、日本のサッカーの出発点のところにさまざまな形で貢献しているという…、なんか自分の自慢話みたいになっているのですが…(笑)、自分ではないですね。自分の母校と自分の勤務校ですね。それでもちょっと照れくさい。けど誇りを持ちながら、いま話をさせてもらってます。

## 6. 全国高体連サッカー専門部と「茗友サッカークラブ」

最後にもう一つだけ言わせていただきます。戦後、GHQの指導もあって、全国高等学校体育連盟（高体連）という組織ができるわけです。これは競技種目の連合組織で、サッカーだけでなく、色々な種目の…野球は違うんですけど…、ラグビー専門部、バレーボール専門部、様々な専門部があり、その中の一つがサッカーなのです。そして、戦後組織された全国高体連サッカー専門部の委員長は、実は歴代、東京高師、東京文理大、東京教育大、筑波大と、「筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ」の方々も歴任されています。この4月から、都立石神井高校の顧問をされている横田さんになりました。

他の専門部は大体、校長先生が委員長をされるんですけど、なぜかサッカーは、専門部ができた当初から、現場の先生が汗水たらしてやっています。こういった先輩たちの御苦勞を踏まえて我々がいるんだというのをありがたく感じながら、半分母校の自慢話(笑)をさせて頂きました。「学閥」にとらわれてはいませんが、ときにはふと立ち止まり、先人の足跡をたどることも必要だろうと思います。

因みに、この表の続きには、筑波大じゃない方の名前がおそらく出てくることになると思います。

表 4. 全国高体連サッカー専門部委員長 在任期間

委員長	在任期間	出身校	卒業年
岩野 次郎	昭和25(1950)～37(1962)	東京高師	昭和2(1927)
藤野 源次	昭和38(1963)～45(1970)	東京高師・文理大	昭和10(1935)
松浦 利夫	昭和46(1971)～52(1977)	東京高師・文理大	昭和16(1941)
川口 玲雄	昭和53(1978)～56(1981)	東京高師・文理大	昭和23(1948)
加藤 三郎	昭和57(1982)～平成元(1989)	東京教育大	昭和29(1954)
鈴木 勇作	平成2(1990)～5(1993)	東京教育大	昭和31(1956)
高田 久行	平成6(1994)～9(1997)	東京教育大	昭和41(1966)
上野 二三一	平成10(1998)～15(2003)	東京教育大	昭和45(1970)
平山 隆造	平成16(2004)～19(2007)	東京教育大	昭和50(1975)
大倉 健史	平成20(2008)～23(2011)	筑波大	昭和53(1978)
横田 智雄	平成24(2012)～	筑波大	昭和56(1981)

中塚：それでは賀川さん、よろしくお願いいたします。



# プレゼンⅣ：関西で育まれた高校サッカーを振り返って

賀川 浩（スポーツジャーナリスト）

## 1. 歴史を記録することの大切さ

賀川浩でございます。原稿はできてるんですけど、いろいろと考えたいことがあったものですから…。

90年を25分でしゃべれというのはそもそも無理なんですけれども、私どもは、たかだか大正7年＝1918年から1942年ぐらいまでの話ですから知れてるんですけど、ものごとには必ず原因がありますから、いくらでもさかのぼっていくと次から次へ話が出てきて。もういっぺんちょっと調べなおそうとして予想外に時間がかかりました。

調べなおすについては、僕らの仲間の岩谷俊夫が作った『高校サッカー40年史』が大変役に立ちました。彼は新聞記者でしたから、新聞記者らしく非常に読みやすくまとめている。それだけに、昔からボロボロになるほど使って、もちろん彼の方から何冊かもらってるので余分はあるんですけど、とにかくみんなボロボロになるくらい使い込んでいます。そういうまとめたものを作ってくれたことはよかったです。彼もその時に、代表のコーチをしてましたし、毎日新聞もそれほど忙しくないはずですけども（笑）、彼は仕事もまじめにしていたからまあなかなかの激務だったと思います。

僕も90年史をやったってというのは非常にありがたいことです。といいますのは、ここには国会図書館の福島先生みたいに、調べることの専門家がおいでですが、いまほど歴史を調べるのに便利な時期はないわけですし、インターネットでいろんなところの知識が非常に簡単に入って考究ができます。もちろんインチキな話もあるかもわかりませんが、非常にたくさんいろんな話が入ってきますよね。世界的にもそれができる。しかも自分のコンピューターで、パソコンで集積できる。そういう時代から見ると、昔これだけ作るのに、毎日新聞の資料室に入って、新聞の記録と全部照合したと思うんですよね。そういう作業というのは、いまの時代から見たらものすごい気の遠くなるような作業です。今はまだ資料が多すぎて困ることはあるんですけども、そういう時代に彼がやってくれていたもんですから、改めて彼の功績をありがたいと思います。

そういう時期だから、いくつかの間違いがあつたりします。そういうことも含めてもう一度、いい90年史をつくるためにはまだまだやらなきゃいけないことがあります。

## 2. 日本フットボール大会創設の頃

90年史ないし、40年史、この大会が始まったいきさつについて、第1回の審判をやっている上野義一さんという大先輩がいるんですけども、その人は、第1回の際は同志社の学生です。同志社大学ってご存知のようにラグビーの名門ですよ。しかし上野義一さんがいたころには、サッカー部はあったんですよ。同志社大学ではラグビー部よりサッカー部の方が先にあったんです。明治29年から30年ぐらいまでは、ずっとサッカーやってたんです。ところがラグビーが慶応から入ってきて、サッカーが全部ラグビーに変わっちゃう。誰か非常に強烈な個性のある指導者がいたと書いてありますけど。ですから上野さんが第1回の審判でラグビーの審判をやった後、よく審判をやってるんです。その人でさえも、「毎日新聞のどなたの発案か知らないけども」ということが40年史には書いてある。

おそらく岩谷くんはいきさつを知ってたと思うんです。それは、高体連のラグビー専門部がつくった35年史にもあったはずなんですよね。55年史にもちゃんと杉本貞一さんっていう、慶応を出て大阪でラグビーの信奉者であった大先輩が、日本で大正6年にラグビーを盛んにしたいとって、毎日新聞に協力してくれということをしり入れて、そこから始まってます。それはたぶん真実であろうと思うんです。僕は一回お目にかかったことがありますけど、その頃はまだそのことにあまり興味がなかったもんだから、直接お聞きしたりはしてないんです。この話を知ったのは後になってから。高体連のラグビーフットボール部の編集による55年史あるいは35年史をみて、あるいは毎日新聞のそういうのを読んで知ったわけで。

要するに、関東では大正6年に第3回極東大会をやった。その極東大会で負けたけれども、それが刺激になってサッカーがどんどんやろうということになって、東京蹴球団のサッカー大会が大正7年に始まる。同じことが名古屋でも始まる。

大阪でもそういうふうな解釈したいんですけど、どうやらここには杉本さんが毎日新聞になんとかしてくれと言ったのを、毎日新聞はそれをよっしゃやろうと引き受けてくれた。それを引き受けるには伏線があった。その何年か前に毎日新聞が、自分のところでオリンピックなんたら大会というのをやって、その大会で陸上競技の何

種目か、走り高跳びやランニングをやってですね、最後の演目として、ラグビーの模範試合をやろうというのがあって、そのラグビーの試合もメンバーの問題があって流れてしまったのです。毎日新聞自体はラグビーに関心があったと思うんです。そういうことから、杉本さんの要請をいれて、じゃあやろうと。そこからはどこにでも載ってる話です。



さてまあ、毎日新聞が積極的にやろうと言い出したのは、当然、当時の新聞社としては朝日新聞との対抗意識がありますね。2年前の大正4年には高校野球が始まってますから。高校野球はすでに全国大会というふうなやってる。チーム数も多い。それを朝日新聞がやってるんだから、同じ大阪で橋一つ隔てて本社があった競争意識の強いところですから、これは何かやりたい。で、フットボールをやろうということになった。

ラグビーをやろうと決心したはいいいんだけど、ラグビーはその頃関西には京都の三高と同志社しかなくてですね、東京には日本のラグビーのパイオニア、慶応がありますよね。リーダーです。リーダーだけれども、東京でも試合相手は横浜外人しかないわけです。チームがないわけです。じゃあ、高校野球があんだけ盛大に始まっている。高校じゃない、中等学校の野球ですね。全国大会が始まっている。

別の競技大会をやろう、面白いスポーツだ、しかし集まるのは3つだけだということでは、これは事業としては考えないかと。そうなったときに、サッカーはすでに、中塚先生の話にあったんですけど、高等師範のおかげというのか、あるいはもっと別のこともあるんですけど、ほぼそういうルートで関西ではいくつかの学校がお互い交流試合をしていた。ということで、とりあえずフットボールって名前のもとにアソシエーション式サッカーを入れた。まあ、フットボールという名前にしたのがそもそも不思議なんです。当時はサッカーの方はほとんど、御影師範にしても神戸一中にしても、それぞれサッカーやってるところはほとんどフットボールという名前は卒業しちゃって、蹴球部にみななってるんですよ。そこをわざわざフットボールと言って、ラグビーとサッカーをする…。

配布資料に、毎日新聞の12月の紙面があるのでご覧いただければと思います（p33参照）。

大正6年ですから、第一次世界大戦がボツボツ終わりに近づいている時で、ロシアの動向が気になっているような記事がいっぱい一面に載っております。その最中に、第1回フットボール大会をやろうと。それは、アソシエーション式とラグビー式とやるんだと。大正7年、来年の1月の12,13日にやろうということが記載されています。

もう1枚（p34）は、いよいよ今日から始まるということで。やるとなるとすごいですよね。連日のように紹介記事です。サッカーとはこんなんだと。時には写真でラグビーのプレー、サッカーのプレーと。載せているのはいいんですけど、そのときに間違っただけでサッカーをラグビーと書きちゃったりして、思い違いかわかりませんが、その記事が残ってるのがあります。それくらい一所懸命やっていました。

そういう中に、これはノックアウトシステムですから、同点の場合どうするかということもちゃんと書いてあります。その時には、コーナーキックが多い方が勝ちにすると。コーナーキックが同じだったら、ゴールキックが少ない方が勝ちだと。ゴールキックまでいくのはいきすぎだと思うんですけど、そういうふうにしたんでしょうね。そのことの裏付けは、すでにその前の年に、御影師範が主催した、御影師範の交流大会というのがありまして、それに出た神戸一中は、大阪の明星商業と試合をして同点になって、キャプテンとレフェリーが相談して、ここまではこれにして、次の時は延長をやろうと。延長で決しない場合は、コーナーキックの数でいこうと。というようなことを話し合っただけで、やったと。そのときの理由がですね、「オリンピックルールによる」、と神戸一中のサッカー誌には書いてあるんですけど、まあそんなオリンピックルールあったかという話ですが（笑）。

そういうようなことで、一応ノックアウトシステムですから、次に進む手はずを考えて、大会として毎日新聞がスタートしてくれたわけですね。

### 3. 予選制の全国大会

この毎日新聞が、第9回の大正15年から思い切って全国8地区の予選制度を導入して、そこから全国大会ということになるわけです。そこに至るまで、つまり大正15年までは、地域のローカルな大会だったんですね。ですけれども、なんていったってまだよそが予選制度を誰もやらない時に、毎日新聞は頑張って自分たちで全国の予選制度を導入して、それで全国大会だと決めたわけで。ということは、一応日本協会も了承、JFAも了承しているわけですから。それで日本フットボール大会が今日まで90年を超えて、大会は90回大会となりました。そういういきさつになっております。

これは、いろいろと、特に関東の場合はチーム数も多い。チーム数は多いし、第一回の関東大会には

宮さま方もたくさんおいでになって、非常に盛んなように見えた。在日英国大使館からイングラウンド FA の方へ、日本でサッカーが盛んになっているから FA からカップを寄贈したらどうかという話がいつて、日本へ持ってきてくれた。それが JFA 創設のきっかけになった。それぐらい、関東の方では盛んに華やかになりました。これが、朝日新聞の後援です。

毎日新聞で後援を引き受けてくれた事業部の方もすごいんですけど、ちょうど全国の予選制度に踏み切るといふのをやったときの、中村さんという事業部の方も、これはラグビー畑です。だから私どもは、ラグビーがきっかけを作って、ラグビーの一所懸命やった仲間がサッカーに関しても、大いにいろいろな点で貢献してくれたということ、今さら感謝したいと思っております。そういうことからいきますと、近畿の大会みたいなもので、初めの段階ではその近畿の中で一番強い、古くて強い御影師範が優勝してきたわけです。第 8 回から後の全国大会となっても、戦前はほとんど御影師範と神戸一中と朝鮮半島と広島、岐阜師範と、箱根を越えたことは、私が 1 年生の時に埼玉師範に負けたのが 1 回だけ。ですから、全国大会になってから近畿勢が勝つというのは、もちろんレベルの問題もありますけれども、これは当時の交通事情を考えると…、

昔は旅というのは辛いものでして、今はどこ行くにもホイホイと行けて、今日もこちらへ来るときに、最近足が悪いから、エレベーターに乗ったら、若い女性がベビーカーをガッと乗り入れてきたので、「ああそうだ、ベビーカーに子供を乗せて新幹線で旅行できるような時代になってるんだな」と。その割にはエレベーターは大きくなってないから狭いなと思ったりもしましたけど、そういう旅っていうのは、今や楽で快適なのが当たり前ですよ。そういう時代と違いますから。昔は遠征の試合に行くというのは、ハンディキャップがものすごい大きいですよ。だから御影師範が勝ったり、兵庫県の神戸一中が勝ってですね、威張ってるのはあまり僕は好きじゃない (笑)。もっとも私は、神宮大会に出て、東京へ来て優勝はしましたけど (笑)。1 年後輩の時にも東京へ来て優勝しました。僕より 2 年上の時にも東京へ来て優勝しました。

#### 4. 明治神宮大会のこと

余計なことを言いますが、40 年史、60 年史などでも、非常に日本のスポーツで大事なところを占めてるのは神宮大会です。これはなんて言っても明治節。東京では晴れに決まっているという話がありまして、11 月 3 日が中心です。この日は日本における近代以降つくれた明治大帝の誕生日ですね。明治大帝を記念してつくったスタジアムを中心に、明治神宮奉賛会が中心に開催した。それが後に、今度は厚生省の管轄になって、先ほどから話が出てますように、役所がだんだん手を出すようになってきて、厚生省がやるようになるんですけども、それだけに、いわゆる新聞社の主催する大会とはまた別の経緯がありまして、特に当時、日本の統治下にあった朝鮮半島の選手たちにとっては、神宮大会で優勝するっていうのは、非常に士気が上がることなんですね。だから、1936 年のベルリンオリンピックのマラソンで優勝した孫基禎さんも、僕は話聞きましたけれども、彼は新義州からずっと夜行で乗り継いで大会に参加するためにやってきて、良いタイムでマラソンで優勝するんです。それはやっぱり、神宮大会で優勝する、しかも東京に対する朝鮮半島の対抗意識がありましたから。これがのちにサッカーで朝鮮半島の代表チームが、この日本フットボール大会には夏休みの都合で来れないことはありますけど、神宮大会の時はずいぶんよく出てきた。そういうことも一つの歴史になると思います。

## 5. 戦前の関西のグラウンド

そういうなかで色々なエピソードがあって、初めは豊中でやって、宝塚や甲子園の野球場でも試合しました。そのあとに甲子園南運動場というのができたのです。御影師範が7連勝した後、神戸一中が初めて優勝するのは、野球場のグラウンドでした。野球場は外野が非常に広くとってありました。もちろん昔から阪神タイガースのホームグラウンドであり、高校野球のメッカであるわけですけど、外野を広くとって、ラグビーとサッカーをできるようにしたのが最初つくった時の甲子園野球場です。

で、その野球場は、戦後のプロ野球でホームランが非常に人気がありますから、小さくするんですね。ラッキーゾーンというのを作って塀を前に出してくるんですね。外野の一番前の席と外野の守っている一番後ろにもう一つ塀がありまして、その間に空き地があったんです。ベーブ・ルースが来た時も甲子園でホームランがここに当たったという印がありますね、それくらい広がったんです。そういうところで、ラグビーもサッカーも3年ほどやりました。

で、そういう時期があってそのあと、昭和5年から、南運動場というのが出来まして、そこで戦争になるまでやりました。やっとなグラウンドが固定されたなと思ったら戦争になってしまいました。戦争になると南運動場のすぐ向こう側に競馬場があって、その向こうに川西航空機の製造工場があったもんですから、当然、爆撃で狙われたと。そのために、高射砲の基地があると。コンクリート作りの立派な競技場でしたから、そのコンクリートのスタジアムを一切合財、軍が使用すると取り上げたものですから、戦争が終わって、僕らが帰ってきて、「南甲子園はどうなった？」と聞いたら、あれは海軍のものになっていたから、米軍が占領して燃料置き場になっている、見る影もないよ、と言われて見に行くのも辛くて辞めたこともありました。

まあそういう、南運動場の時代というのがあって、そういう変遷を経て、戦後に行くわけです。

## 6. 御影師範と神戸一中

戦前の中で一つ面白いのは、御影師範というのが非常にサッカーに熱中しまして、例えば、御影師範の大正末期の和歌山中学から御影師範から赴任した先生が書いた本なんですけど、和歌山中学は野球のメッカで、全国大会で2回ほど優勝しているんですけど、その先生も野球は大好きなんだけど、御影師範が来て、蹴球部が練習するのを見て、サッカーの虜になった。サッカーの試合ではなく、練習するのを見て虜になったということだから、よほど練習の迫力、気合いが入ってたということだと思います。それは練習に立ち会った者はわかると思います。グラウンドの中の何とも言えない張り詰めた雰囲気というものがありますから。それを、おそらくその先生は気がつかれたのだと思います。そういうことが書かれています。そういう気風があったということで、とにかくトコトンまで練習。体をいじめ、練習する。同じようなことを練習する。サッカー何も知らない、兵庫県の田舎から出てきた、高等小学校を出て、中学生よりも2歳年長というのがありますが、その田舎から出てきた少年の丈夫な体をサッカーでみっちり鍛えて良いチームが出来たと。それが、ここにいます玉井幸助先生。明治42年に赴任されてきたんですけど。それより前の明治29年の頃にすでに御影師範はサッカーを始めたというような歴史もあります。で、その壮絶な練習を繰り返し、実力が上がって7連勝をしたと。で、それに対して、私ども、私どもがというと自慢になってしまいますが、まあ事実で、第1回の日本フットボール大会の準決勝で、1-0で神戸一中は御影師範に負けるんです。その負け方も非常にバカバカしい負け方で、それは、ゴールキーパーが審判の合図なしに蹴ったら、それは非紳士的だと。相手が配置に着いてから

蹴らなければならないという解釈だったんですね。それを2度も繰り返して、それはペナルティーだと言われて、そこで点を取られて負けたという面白い話があるんですけど…。まあそういうところから、7連覇の間、4回5回、挑戦しては跳ね返されて御影師範が優勝していると。しかも、同じころ神戸の高等商業に、まあ当時の高商というのは専門学校ですが、今の神戸大学のことですね、その主催大会とか関学の主催大会とか色々あるんですね。そういうところでも中々勝てない。

その悔しさが強くて、どうしようかと色々やっている最中に、ビルマ人のチャー・ディンに会って、インステップの蹴り方から教わった。チャー・ディンはスコットランド人からサッカーを習ってるんですね。彼がビルマにいる時に。スコットランド流のショートパスです。彼の HOW TO PLAY ASSOCIATION FOOTBALL の最初のところで、そもそもフットボールはスコットランドで始まったと書いてあるぐらいで…。こればかりは笑う人も多いんでしょうけど、まあスコットランド人に習ったという証拠ですよ。そのチャー・ディンさんが、スコットランド式のショートパスを教え、あるいはサイドキックを教えた。それで、そもそもこの大会、旧制中学というのは、私は1924年生まれで1941年が中学の5年生で最上級生ですから、U17ですね。僕は12月生まれだから、本当は8月の試合の時にはまだ完全なU17ですね。16歳です。向うの方は年が2つ上ですからU19ですね。U17がU19と試合するわけですから、これは今やってみてもそう簡単には勝てないですね。いわゆるエイジグループという考え方は、上手な者、強い者はU17の選手でもU19へ入れたらいいんだということになりますけど、U19のやつがU17に入って試合したらいかんというのがだいたいの考え方ですね。それははじめからU19とU17が試合するわけですから大変なことです。ですけども、我々の先輩が、どういうものか知りませんが、2歳上の連中に負けて当たり前なのが、負けることが悔しくてしょうがないので、それを日夜考えていた。

御影師範というのは、先ほど言いましたように練習も非常にしっかりした学校なんですけれど、応援が凄いですよね。昔の書いたものをみると御影の応援のおじさんがグラウンドの横で「殺すぞ」とか「お前らなんや」と言っている。いちいち気に障ったという話もあってですね、どこか遠い国のサッカーの応援の話みたいな熱狂ぶりもあったようです。

## 7. 今につながる神戸一中のショートパスサッカー

ということもあって、絶対に勝ちたいと思った少年たちがチャー・ディンに大正12年に巡り合ったわけですね。

その前から徐々にチーム力が上がって、いい選手がそろって、大正14年に初めて勝つというようになった。それがいわゆるショートパス。そして、小さいからぶつかったら負ける。ぶつかったら負けるし、キック力も2歳上の19歳の平均のキック力からみれば17歳は弱い。長距離は届きませんわね。だから短いパスにすれば届くだろうと。速いボールも蹴れるだろうと。それをつなぐ。今の言葉で言えば、ボールも人間も短くつないで走る。走って止まって走って止まるから、相手は立ち止まる。立ち止まれば今度は体が大きいから、いくら練習していても小さいやつがシュッと前に出る方が早い。そういったことが自然にわかってきて、徐々に神戸一中は勝てるようになった。

しばらく調子が悪かったけれども、昭和5年の時に2回目の優勝をします。この時はベルリンに行った右近徳太郎や、早稲田の選手達が目置いていた大谷一二、朝日新聞で記者をしていた大谷四郎さんの兄貴ですね。そういう優秀な選手がいて、この時のキャプテンが非常にしっかりしていたので、いい

練習法を編み出して、厳しくてしかも効率的な練習法を編み出して、それがずっと伝わるわけです。それが伝わって、その後、昭和8年からは断然神戸一中の方が御影師範より優勢になるというわけです。

優勢になる一つのもと、これも中塚先生の話にあった、東京高等師範を出た河本春男という若い優秀な指導者が来て、先輩がしょっちゅう来るような組織をつくり、伝統的な技などをいかにして伝承させていくかということ先輩達と一緒に考えたのです。

昭和5年の第9回極東大会の代表選手の出身校が書いてあります。

この時の日本代表の中に高山忠雄という、後に神戸高校の校長先生になって、校長のくせにグラウンドへ一緒に出て生徒とボールを蹴っていたという面白い先生がいます。その高山忠雄、若林竹雄という優秀な、高山忠雄さんの方が少し上ですね。それから若林竹雄というような優秀な選手が出てきて、それがショートパスという、当時の新聞を見れば、その頃からショートパスという言い方が出てきて、ショートパスがその次はスルーパスという言い方が出てきて、相手のラインの裏へ通して走りこむというね。そういったことをやるようになって、変わっていきました。

彼らはおそらくこういうエイジグループで2歳ずつ分けていく制度からみると、U17とU19が試合をするという考え方は、これは非常に変なわけですけど、それがケガの巧妙みたいになって、たまたま神戸一中が打ち込んで自分たちが勝てるサッカーをしたいために作り上げたのが…、というところまで来れば、世界的な視野の広い頭のいい記者の皆さんは、僕が何を言おうかということは、おわかりかもしれませんが、今のバルサのサッカーですね。

バルサのサッカーは、イニエスタ、メッシ、シャビ、みんな175cm以下、あるいは170cm以下。メッシは168cmかその辺りですね。彼ら独特の細かいステップ、テンポ、リズム、というものが、例えばドイツのディフェンダーであれば長い脚をどうやって出すかというようなことにつながってくる。

こういうことはまたいろんなところで話しをするとして、これからの課題にしたいと思いますけど、戦前の古い中学校の話も今につながる、だから面白い話もできるし、面白い考え方もできると思います。





## ディスカッション

中塚：どうもありがとうございました。

今回のシンポジウムのサブタイトルに、「戦前の中学サッカーから未来へ」としているのですが、賀川さんからは「未来へ」に加えて「世界へ」とつながっていくようなお話をいただきました。

この会場は7時でお開きです。残り40分はフロアの皆さんと一緒に自由に議論していけたらと思います。まず、ここまでの話の中で、どんな観点でもかまいませんので、皆さんから質問は補足などをいただきたいと思います。いかがでしょうか？

発言者ははじめにお名前を言っていただいてからお願いします。

### 1. 戦前の学校制度と各年代の競技会

千葉：一般の部で参加させてもらった千葉と言います。高校のサッカーの始まりが書いてありましたけど、大学はいつごろから始まったのでしょうか？ 大学と高校の違いがあるのかを教えてください。

中塚：これは、牛木さんからお願いします。

牛木：はっきり年代は覚えてないですが、大正の終わり頃にですね、大学の大会が始まったのですが、関東ではその頃ですね。

千葉：じゃあ、高校のほうが先だったということですか？

牛木：高校っていうか、旧制高校ですか。

千葉：高校っていうか、この大会の。

牛木：この大会のほうが先です。当時は高校でなくて中学なのです。中学の大会のほうが先で、そして大学に入ってきます。先ほど名前が出ましたが、例えば東京大学の場合だと、東京高等師範附属中学を出た新田純興さんという方が、旧制の第一高等学校に入って、そして東京帝国大学に入ってきて、そこでサッカー部ができ、さらに大学の大会をオーガナイズした。

そしてその人たち、新田さんや、サッカー協会の会長になった野津謙さんが東京帝国大学にいたわけですが、その人たちが、自分たちの学校を強くするためには、自分たちの学校に入ってくる旧制高等学校を強くしなくてはならないというので、旧制高等学校の大会を始めました。それは、今の高校選手権とは関係がなく、戦後学制改革のときになくなってしまった大会ですね。なかなか説明が難しいんですよ。旧制と新制が入り混じってますから。だけどそれは、昔の中学校大会のほうが、もちろん大学大会よりは先でした。しかし、旧制高等学校の大会はちょっとだけ遅いということですね。

賀川：たとえば旧制高校の大会。スポーツが入ってくるのは大体、いろいろなところへ同じように入っ

てきますよね。それは、どの年齢層のところに入るかということであって、大学は、たとえば関西学院は、明治末期には大学ができるのですが、その時には神戸外人クラブ（KR&AC）と交流のある先生が、サッカー部を作ってという話はあるんですけど、そこからすぐにサッカーにならないんですね。特にサッカーの場合は。若い年齢からのほうが体になじみやすいことはありますから。



先ほど話に出た鈴木重義さんというのは、東京の小学校の時からやり始めて、東京高師附属中でサッカーをやって、それから早稲田の高等学院に入ると。早稲田の高等学院というのは大学の予科ですから旧制高等学校の年齢なんです。その人が第一回インターハイに出て優勝するわけですね。そういうふうには、旧制中学を出て高等学校を出て大学に行く。ですから大学は、先に始めてるところもあることはあるんですけど、案外途中で切れるところが多いんですね。先ほど言いました同志社なんかも、明治期にサッカー部はあるんですけど、途中でなくなったり、切れたりするわけです。やはりそれは、下から上がってくる力があって、どんどん大学が増えていくのはもう少し後になります。

誤解されるといけないので訂正しておきますが、さっき「大学大会」と言いましたが、これは全国大会ではなくて、リーグ戦ですね。関東の大学のリーグ戦。大学の大会というか全国大会はですね、戦後、昭和 27 年ごろから始まっておりまして、それは今でも続いていますけど、戦前には、大学の、いわゆる日本式に言う大会ですね、集まって勝ちを競い合う大会は行われていない。関東の優勝校と関西の優勝校ですね。関東の優勝大学と関西の優勝大学の対抗戦というか、日本一決定戦というのは行われましたけど、現在のような高校選手権のような大会は戦前の大学では行われていません。

## 2. 新聞社が主催者となった背景

田村修一：田村です。サッカーのジャーナリストをやっています。賀川さんの話で、まず野球が、野球の全国大会は甲子園ですよ。それに対抗するために大阪毎日が考え、ラグビーからいきなりサッカーをやってというお話だったのですけれども、まず新聞社がスポーツを主催するというモデルという形ですよ。それは例えばフランスでは「ツール・ド・フランス」というか、そういう他のいろんな競技でありますけど、ただ日本のほうが古いような気もするんですけど…。ヨーロッパとかアメリカと

かにモデルがあっけははじめたことなのか、そうじゃなくて日本独自のものであるのか。なんで新聞社がスポーツに行ったのかっていうのがね、そもそもその辺の起源というか、どういうところから始まっているのかっていうことなんですけれども…

賀川：僕も新聞社にいたし、事業部も少しやりましたけどね。新聞社は、特に大阪あたりは朝日と毎日の争いが非常にすごかったですね。あとで読売さんが来た時も競争になりましたけど、これは戦後の話ですね。

新聞社が事業をやるといのがですね、まあ、高校野球も、あれは元々ミズノの先代の社長さんがボールやなんかを作ったりして、中学校の野球を始めようというんで、一つ大会を打ったんですよ。朝日新聞はこれいいんじゃないかということで、うちがとるよみみたいな感じで大会が始まったわけですね。これは、販売政策上、非常にいいわけですね。宅配がありますから余計でしょうね。それは単に新聞社の宣伝というよりも、販売にも非常に力がありますから。それは読売ヴェルディ盛んなころ、東京の朝日新聞はヴェルディのプラチナ切符と、それから長嶋巨人の勢いでね、毎日新聞は減っていくとかね。そういうことを販売の仲間はみんな言うてましたよ。そういうことも含めて、新聞社が事業するということは、日本には割合早くから、外国の例よりも日本のほうが多いんじゃないですか。

田村：そうですね。あまり聞かないですね。

賀川：マラソンを取り合ってね、新聞社と放送局が…。マラソンは視聴率の問題ありますよね。マラソンは平均して二ケタの視聴率とれる遊びですが、あんな2時間半も走ってるだけでみんなよく観てくれるなと思います（笑）。よくあんなものやるなと思うけれども、これはやっぱり販売にも…。

牛木：野球の甲子園大会はですね、サッカーの大阪毎日の大会よりも先に行われてるわけですが、これは、フットボール大会に始まりは似せてですね、京都の三高というのは京都大学ですが、京都三高の先輩が野球の大会をやってくれと言って、たまたま知ってる人が大阪にいたので持ち込んで始まったんだというふうに聞いています。聞いてるといのかそういうものを読んだことがあります。毎日のフットボールの大会も京都の人たちが持ち込んだ。大阪毎日に知り合いがいて持ち込んだというので、最初は上級学校の、高等教育の学校がスポーツを盛んにしようと思って新聞社のほうに持ち込んだんだということですね。しかし朝日の高校野球、当時の中等野球ですね。中等野球の成功に刺激されて他のところもいろいろはじめて、スポーツが新聞の販売拡張に役に立つというので、日本独特のスポーツの後援・主催というのが始まったという。

我々は本来、メディアの人間としてはですね、世間で起きたことを取材することが仕事なんだけど、自分たちで取材対象を作って、自分で作ったものを取材、報道しているというので、本来の在り方ではないと。僕は、フランスの自転車の大会の方は日本の真似をしたんじゃないかと…

田村：真似かどうかは別として、イベントのない時期に、ツール・ド・フランスもイベントの枯れた時期にやっています。パリダカもそうですね、2月の一番ない時期にやってるから、その部分は完全におっしゃる通りだと思います。（田村註：実際のツール・ド・フランスは、レキップ紙の前身である

ラウト紙が、先行する他社主催のレースに対抗する形で 1903 年に第 1 回を開催し、今日に至っている)

中塚：補足しますが、サロン会員の清水諭さん、筑波大のスポーツ社会学の研究者ですが、彼が『甲子園野球のアルケオロジー』という本の中で、高校野球の始まりについて分析しています。一つは、野球害毒論争があるわけです。野球がものすごく盛んになり、学生が、学生の本分そっちのけで野球ばかりやっていると。たとえば早稲田と慶応の試合は、早稲田と慶応の野球部の試合じゃなくて、福沢諭吉と大隈重信のどっちが偉いかの、要するに学校の看板を背負った戦争になってきたわけで、野球部員は勉強なんてやってるような状況じゃない。それがどンドンエスカレートしていったら、早慶戦が中止になっていくわけです。そんな中、1911 年に東京朝日新聞の紙上で、「野球とその害毒」の連載が始まる。学生野球このままではいかんぞというキャンペーンを、東京朝日が大展開するわけですよね。一高校長の新渡戸稲造や、学習院院長の乃木希助らがそのようなスタンスで意見を言う。

その系列の大阪朝日が、そのキャンペーンの 4 年後には野球の大会を始めるってのがすごいことだなと思うんですが、それも清水さんの本の中で分析されています。大阪朝日の主張は、我々がこの大会を主催するのはこういうことだと。つまり報道の使命というのは、事実を伝えるということだけじゃなくて、良き指導であり、鞭撻なんだと。だから自分たちが、学生野球はこうあるべきだということを、自分たちが主催者となって示していくのだ、ということです。そのような記録があり、それを清水さんが引用されている。まあすごくおこがましい話だなと思うんですが、もしかすると背景にはそのようなことがあるのかなと。

賀川：大阪毎日新聞の、大阪府大会の翌日の記事をもて、非常におもしろいのがあり、これ勇壮だね、体と体をぶつけあってね、それが男らしい競技だということを強調された。それともう一つ、レフェリーに対しては絶対服従だと。それはまた野球と違う点を書いてあるってということがどっかに書いてある。これはこれで、こういう競技を盛んにすることは我々の使命なんだということを書いてある。特にはっきりと書いてあることは、新聞社の頭の中には、スポーツするのは学生。学生だとしか思っていない。学生にスポーツが発せられるのは非常に結構なことだし、野球が盛んになることは結構なことだけれども、フットボールはこんなに面白いのに人気がない。それほど盛んではないから、我々が盛んにするんだ、という言い方をしてますね。

### 3. 浦和高校のエピソードー浅見俊雄氏より

中塚：ほかいかがですか。戦前から、戦中・戦後すぐくらいまでのところをここでは取り上げているんですが…。じゃちょっとエピソードなどをお聞かせ願えればと思います。浅見俊雄さんがいらっしゃいます。先ほどの牛木さんの話の中でも紹介がありましたが、旧制中学で入学されて新制高校で卒業された年代です。この年表の中では、おそらく一番右端の浦和高校優勝のメンバーが浅見さんたちじゃないかと思うんですが。

浅見：あの頃の浦和は子どもがサッカーをよくやっていて、私も幼稚園からサッカーを始めました。優勝校の表を見てもらうとわかるんだけど、昭和 11 年かな、埼玉師範が優勝しています。私の家は割

と師範に近いところで、凱旋してきて、校庭でドンドコドンドコ優勝のお祝いをやっているのを見に行きました。まあそんなこともあって浦和の小学校ではサッカーをしていたんですね。あの頃は特に師範の附属小学校と第二小学校がかなり盛んでしたね。もちろんその頃学校対抗で試合するようなことはなかったですけど。

師範の附属幼稚園は女子師範にしかなかったのそこに入り、そのまま女子師範附属小学校にあがった。その学校は人数は少なく男女一緒のクラスだったので、幼稚園から男女一緒にサッカーもドッジボールもやっていた。小学生がサッカーをやっているの、同じキャンパスの幼稚園生が見よう見真似でやっていた。先生が教えるなんてことはまったくなかった。自分たち



ただでグラウンドでボールを蹴って遊んで、試合もしていた。で、6歩ハンドってのがあった。PKですね。要するにゴールを守るのに夢中になって手で止めちゃうと、6歩ハンドと称してゴールから6歩のところからシュートをする。そういう時に、守るほうはゴールの後ろから走って、ネットなんてないですから、ゴールから6歩大股で連続して飛ぶんですよ。蹴るほうはちょこちょこ6歩歩いて、お互いにここだ、ここだと。で、そういうときどうするかというとその真ん中をとるんですね、平均値ですよ。まあそんなことをしていた。ただ戦争が盛んになりましたから、小学校4年のときにはもうサッカーはやれなくなったかな。

そして戦後に最後の旧制中学生として浦和中学校に入って、サッカー部に入った。男子師範の附属と第二小学校から、また他からも小学校でサッカーをやっていたのが何人かいました。

だから要するに、さっきの話じゃないけど、師範学校がサッカーが盛んだったところはその卒業生が小学校の先生になりますから、全部というわけではないですけども、その小学校でサッカーが盛んになって行く。埼玉の児玉なんかもそうですよね。だから埼玉全般に、そういう先生が、いろんなところでサッカーを子どもたちに教えたっていうよりも、子どもと一緒にサッカーを遊んでくれたっていうような雰囲気ですね。

昔のスポーツ年鑑を見ると、運動年鑑だったかな、浦和の第二小学校が高師主催の大会で、小学校の部で優勝したこともあったようです。要するに、あの頃から子どものときからサッカーをやった人たちがいた。そういうところが広島にしる神戸にしる、サッカーの強い中学校になるということだと思います。

中塚：ありがとうございます。旧制の浦和中学に入学されて、新制の浦和高校で卒業された。先ほどの

お話になりますが、6年間ずっと同じところでサッカーをされていたということですか？

浅見：はい、そうです。特に中学校2年になった時から、高等学校併設中学となって、高校の試合にも、新制中学の大会にも出られないんですよ。中学といっても新制より一年上ですから。もう1つは、4年間最下級生だったので、4年間ボールをつめ、ラインをひき、またボールを抜くといったことをやるわけです。高校2年になって1年生が入ってきたんですが、彼らは3年間ずっと最上級生ですから、そういう仕事はあまりしていない。うまくはできないから、結局我々の学年中心でそうした仕事も続けていた。まあそんな時代でした。

賀川：指導してたのは鈴木駿（駿一郎）さんですか。いや駿さんは市立のほうだったかな。

浅見：ええ、市立です。私たちは宮川博先生でした。これもまたすごいんですけど、当時の五十里秋三校長が、浦高のサッカーに良い指導者がいないのもっと強くしたいって、この校長が確か文理大のご出身だったので、教育大の今村嘉雄教授かどなたか体育の教授のところに相談に行ったんですよ。そしたらその人が、愛媛に赴任している若い先生がいるからその先生が良いと推薦してくれた。そしたら校長がわざわざそこまで行って口説いて、女子高校の生徒みんなに泣き泣き送ってもらって浦高に来てくれた。その宮川先生が2年、3年と指導してくれたんです。今だったらそんな転勤は絶対あり得ないですよ。そういうことで、環境、指導者、仲間に恵まれて強くなったんです。

中塚：福原先生はその後ですか？

浅見：福原さんはその後です。宮川さんが3回目の全国優勝の直前に脳梗塞で倒れてしまったのです。まあ失恋したり、お酒やタバコもだいぶやっていたり、いろいろ悩み事もあったりして。私は宮川先生に、高校生時代、お酒を二人で飲んでいた時に、「浅見、酒、女、タバコっていうけれど、タバコだけは飲むな。サッカーをやっていくなら飲むな」っていわれたんです。それは今までずっと守ってきました。

そんなことで、宮川さんが病に倒れられた後に福原黎三さんが来たのです。

もう1つ言っときます。1952年の第30回大会に優勝した11人のメンバーは今まだ一人も死んでいない。今年優勝60年なんで久しぶりに集まろうって、4月に会をやります。何人集まるかわかりませんが…。(注：9人集まりました)

中塚：ありがとうございます。じゃその集まりをぜひ『高校サッカー90年史』に…(笑)

浅見：1年生に響田三男さんの倅の響田隆史君がいて、1年生でただ一人のレギュラーだったな。

中塚：ありがとうございます。

#### 4. 藤枝東高校のエピソードー松永章氏より

中塚：一方で、牛木さんの話の中で名前が出てきましたが、こちらは戦後派ということになるのでしょうか。やはりサッカーどころ、藤枝ご出身の松永章さんがいらしています。戦前の志太中の名前もところどころ出てきましたが、藤枝東高校の前身ですね。地域にサッカーが根付いていたという話もありましたが、そのあたりをご紹介していただければと…

松永：僕がサッカーを始めたのは小学校2年のときなんですけど、その時たまたま静岡県で国体がありました。サッカーの街・藤枝と言いますけど、それまでは野球だったんですよ。で目覚めたのは、その藤枝であった国体ですよ。あのときのサッカーに対する印象は強烈だった。ということで、サッカーの虜になっちゃった。そのとき第一戦からずっと見てたんですけど、藤枝東、藤枝の街自体がサッカーの雰囲気すごかったんですよ、当時は。老若男女って言うんですかね。観衆がすごかった。雰囲気を作るって言うのかね。それはものすごく子ども心に感動を与えたっていうね。大きな街じゃないんですけど、まあ小さい街ですけど、その中の雰囲気はすばらしかった。



当時国体で決勝を、山陽高校とやったんですよ。でそのとき昭和天皇が、天皇と皇后が決勝を見に来てた

んですね。藤枝東のグラウンドに。その時の決勝の試合は、屋根の上から木の上から、人が鈴なりになっている状況だったんですね。僕個人としては、そのとき印象に残った選手は、宮本輝紀さんですね。あと10番で大石さんかな。

で、藤枝では僕は中学高校と育ったんですけど、中学時代には藤枝でよく全国大会、社会人の大会や天皇杯が開催されてまして、僕が中学のときには藤枝東で社会人、実業団ですか、スコアボードをつけたりですね、当時の日本を代表する新日鉄とか古河電工とかが来てるんです。その中で育ってますんで、サッカーに対する目は肥えてました。

先ほど牛木さんから有り余るお褒めの言葉をいただいたんですが、僕はやはりその当時から思っていたのは、宮本輝紀さんと釜本邦茂さんですかね。当時、高校時代は地域大会、東海代表とか関西代表とか来てやってましたね。そのときにも関西代表できた。僕が中学だったんですけど、その時に関西の10番と9番だった釜本、二村、これが強烈に印象に残ってます。自分の脳裏に焼きついたプレーヤーの印象があって…。

それと、よく「松永さんのお兄さん」といって間違えられるんですけど、あれはお兄さんじゃなく

て、別の松永一家の3兄弟でしてね。ベルリンオリンピックで3点目を入れた松永行（あきら）。この方は同姓同名なんですけれども戦死しちゃいました。それと3番目の松永碩（せき）さん。碩さんは見てないんですけど、碩さんは早稲田から日立に行ってますから、僕が高校出たころ、よく、お前は親戚かと聞かれました、親戚じゃないんだけどもういいから、この際親戚にするか（笑）、ということで話がいったるんですね。

藤枝はほんとにサッカーが盛んでしてね。僕も小学校2年からサッカーの虜になってですね、朝学校に行く時から、缶を蹴って登校したり、朝学校の一時間前にサッカーをやる、昼休みや授業の合間の10分間でもサッカーをやる。それから放課後にまた1時間くらいサッカーをやる。しかも校庭にはごっちゃごちゃのチームがあって、クラス対抗で試合をやっていた。30~50のチームがあって、200~300人がボール1つでサッカーをやっていた。そういうところで育っているから、もう小中高でサッカーはやり尽くしたということですね。高校で燃え尽きちゃったんですね。

エピソードはいろいろあるんですけど、高校時代、僕は大きな大会を、記録となる大会を2つ逃しているんです。一つは高校1年のころ、全国大会での藤枝東3連覇がかかっています。国見が一番近いときがありましたけど、3連覇は未遂になりました。僕も2年、3年のころに藤枝が全国優勝しましたが、1年のとき3連覇かかっていたんです。当時「ジャガイモ」ってニックネームがついてたんですよ。高校1年のときの全国大会の予選で、準決勝と決勝の延長で決勝ゴールあげたんですよ。3連覇の切り札としてですね、長池実さんが乗り込んだんですよ、藤枝東が。第一戦と第二戦は、僕は出たんです。けど第三戦はですね、鎌倉学園とやったんですけど、そこで長池さんは僕を外したんですよ。そのとき3年生が、「同級生を出してくれ」って言って。鎌倉学園との試合では、僕は完全に休みだということになってメンバーにも入らなかったんです。で、結果的には鎌倉学園と延長で抽選。じゃんけんで負けちゃったんですよね。僕からすると、準決勝、決勝と自信あって、当時僕はナンバーテン、トップ下だったんですけどね、その時に3連覇を逃したってのが1つ。

もう一つが、当時62連勝していたんですけど、唯一0点で終わったのが決勝です。大会3つとって、あと3つを東海大会全部とって、最後の大会の決勝戦です。中高の6年間の総決算になるわけですけど、そのとき準決勝で秋田商業とやっています。本当は、浦和とやりたかった。でも（浦和が負けて）、秋田商業が出てきたから選手たちは気が抜けて、結局延長、再延長の末引き分けに終わった。それでまさにタラレバの話ですけど、再戦やったら5-0で勝ってやるなんて言って…。

まあいずれにしても、高校3年の時の3冠を逃したっていうのが僕のサッカー人生の中でも悔いが残るってということですね。

中塚：ありがとうございます。

参加者A：今のお話にあったじゃんけんってのはキャプテンや代表者がやるんですか？

松永：そうですね。

参加者A：ありがとうございます。全員でやるのかなって思いまして。



中塚：PK 戦になるまでは抽選で決めていた時代が長かったんですね。

松永：補足ですけど、さっきの話に出てきた岩谷さんは、高校選手権は関西の西宮だったんですけど、僕は当時早稲田に行くつもりはなくて、もう就職が決まっていた。それで、決勝で泣いているところを岩谷さんが、「松永君、早稲田に行かないか？」って言ってくださって。それで早稲田に行くことになって。岩谷さんは、僕が早稲田に行くことになった恩人でした。

中塚：ありがとうございました。もうお一方ぐらいご質問ありましたら…

## 5. PK 戦の導入について

参加者 B：テレビ局が試合を取り上げるようになって、延長戦に突入するのではなく、すぐに PK 戦を行うようになったことについてお聞きしたいのですが…

中塚：ではここは、大会運営に携わっている北原さんからお願いします。

北原：本来、90 分やるのがサッカー選手ですが、放送枠の都合上、準決勝までは 40 分ハーフで仕切って、同点の場合は PK 戦ということになっています。決勝戦だけは 90 分やって延長戦もある。

私ども高体連が主催する側ですが、日本テレビさんも主催に入っています。組み合わせ抽選をして、組み合わせが決まりますよね。その後、発表するまでに非常に時間がかかるのは、テレビ局さんに、この試合は生中継したいのでこの時間帯にっていうのをやっています。このように、テレビ局さんの協力を仰がないと選手権が成り立たないというのが現実です。言っちゃっていいのかな？（笑）

まあそういう形で全国大会が成り立っているという認識を持っていただき、その中で PK 方式が採用されているということで、よろしいでしょうか。

参加者 B：はい、ありがとうございました。

## 6. まとめに代えて

中塚：ということで、あと 5 分となり、まとめの時間になりました。

そもそも「90 年」という長い歴史を 2 時間半のシンポジウムに納めてしまうという無理な企画ではありません。なので戦前に限定しました。戦前に限定してもいろんなことがあるということはおわかりいただけたかと思います。

今回のサブタイトルでもある「戦前の中学サッカーから“未来へ”」ということにも少し触れていただきながら、賀川さん、牛木さんにコメントをいただきたいと思います。さらに北原さんより、今度は 90 年史の編集という立場から、本の完成へ向けての課題と意気込みを述べていただきたいと思います。賀川さんからよろしいでしょうか。

賀川：僕はまあ今のままで十分、まあ語弊はありますけど、高等学校の 90 年史、90 年からの話、十分に日本のサッカーに貢献しているし、高校 3 年間の決着をつける意味でも…難しい問題はないと思

ます。まあいずれにしても、技術を、機会を作って練り上げるということにもっと力を入れてもいいと思う。もちろん体を鍛えるところなどサッカーにはいろいろな要素ありますけど、これだけ技術が発達しているけど、高校サッカーの技術が発達しているかはわからない。小さいところを緻密に見ればまだまだ伸びるところはあるので、そこを伸ばせばもっとレベルアップできると思います。

牛木：戦前の中等学校はエリートの学校だったんですが、今の高等学校は大衆化している。そしてそれは非常に人気を集めているので、サッカーの普及のためには非常に貴重な機会だと思います。今の高校選手権も、改善すべきところはたくさんありますけど、テレビの協力を得ながら続けていくほうがいい。むしろやめるべきは夏の高校総体です。夏のあのか暑い時に連戦のトーナメントをやることはないじゃないかと。僕は、高校総体は北海道に持って行って、全部北海道でやればいい（笑）。リーグ戦にして1ヶ月ぐらいかけて受験勉強をやりながらすれば、勉強もできるし、サッカーもできるんじゃないかと思っています。

北原：真摯なご提案を受け止め、夏の総会で提案を出せたらと思っています（笑）。

パンフレットを1枚用意しました。「高校サッカーから世界へ」という、今年の正月大会で日テレさんに作っていただいたものです。「つなげよう高校サッカー GO100（ゴーハンドレッド）」ということで、今回全国大会に出てきた48チームにはボールを3つずつお渡しし、そこにサインを入れてもらって被災地に送るということを、あと2〜3年企画しております（表紙写真参照）。このプロジェクトの代表幹事が日テレ・プロデューサーの澤田勝徳さんで、パンフレットにはこの方のインタビュー記事も載っています。高校選手権にあこがれて高校でサッカーをはじめ、今に至るということです。

前の前の全国部長をされていた上野二三一先生は、テレビが引いても高校選手権はやるんだという心意気だけは忘れないでおこうということを常々言われてました。また、昨日は東京の高体連サッカー専門部の納会があったんですが、納会前の講習会で、JFA 技術委員長（育成担当）の西村昭宏氏に講演をしていただきました。その中で、「日本は100年のクラブの歴史はないけど100年の学校の歴史がある。ぜひ学校のみなさんと手を取り合って歩んで行きたい」と話されました。日本が成功するためには絶対に学校教育が必要なんだということを、この90年史のシンポジウムも含め、改めて感じました。

最後に「90回大会」ですが、年数は「90年」と違いますので、その辺の仕込みも含め、（100周年へ向けて）頑張っていこうと思います。よろしくお願いします。

中塚：私も少しコメントを。母校と勤務校の自慢話になってしまいますが（笑）、これは功罪ともにあるなということを感じます。嘉納納治五郎の流れを汲む教育を受けた人たちが全国各地に赴任したおかげで、日本の学校体育はものすごく充実しています。放課後の部活動も含め、すべての青少年が様々なスポーツに一度は触れられる学校体育のシステムはすごいものだと思います。しかし、学校の中でスポーツが閉じてしまっている。せつかく学校の中にグラウンドも、体育館も、プールもあるのに、学校の中で閉じているのは惜しい。また、プールは夏の間しか使っていない。夏の間しか使わないプールを新設するのに膨大なお金を使っている。このようなスポーツ行政が残念でなりません。

それに風穴をあけたのがJリーグです。いろんな意味でタイムリーだったため、皆さん乗っかって

いただいたんだと思います。Jリーグのムーブメントが盛り上がる中で、学校体育はいらぬみたいな論調も一時期出てきたけど、そんなことはないでしょう。学校で培ってきたものを活かしながら、日本独自のクラブシステムがあるんじゃないかと、私自身はずっと考え、試みている次第です。

『高校サッカー90年史』は、そういうことを改めて考えさせてくれる一つのきっかけだったし、10年後ではなく、1918年の100年後に100年史を作りますので、各地の情報やトピックを集めて、さらにいいものを、引き続き作っていきたいと思います。今日はサッカーミュージアムの津内さんもいらっしゃいますが、各地のサッカー部誌をミュージアムに集めて一元化できればいいなと思いますので、みなさんよろしくお願いします。

以上で2011年度の公開シンポジウム、『高校サッカー90年史』史を語ろう！』を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

